

# 脇田遺跡Ⅲ

福岡県筑紫野市大字塔原所在遺跡の調査

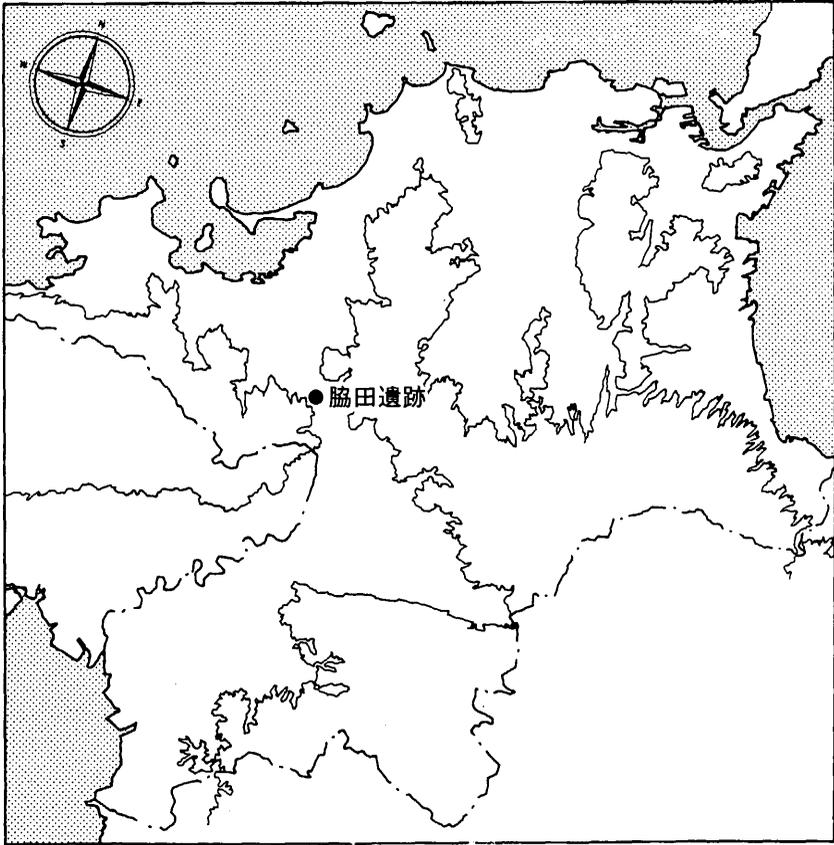
筑紫野市文化財調査報告書

第 43 集

1 9 9 4

筑紫野市教育委員会

わき た  
脇田遺跡Ⅲ



# 序

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中央に位置します。東西から山々が迫り、その間に肥沃な平野をもつ当市は、太古から北部九州沿岸と九州の内陸部を結ぶ交通の要衝として栄えてまいりました。今日までの発掘調査でも中国製の青銅器や陶磁器などが発見され、市の北部は大宰府条坊の一部だったようです。日本で最も古い城である基肄城の一部や塔原廃寺、杉塚廃寺といった寺院跡の遺跡が点在します。また、大宰府から豊前へ通じる官道も当市を通り、近年の発掘調査では万葉集に詠まれた<sup>あしきのうまや</sup>蘆城駅家の跡と思われるものも発見されました。このような歴史に育まれた当市には、たいへん多くの遺跡があります。そして大規模な開発から小規模な建築まで、多種多様の工事が実施されています。今日的な人々の営みのなかで、後世に伝えて行くべき義務を負う文化財を保護するため、さらに努力を重ねる所存でございます。

最後になりましたが、今回の発掘調査にご協力いただきました方々につきまして、衷心よりお礼申し上げますと共に、今回の成果が郷土の文化財に対する関心を深める縁ともなれば幸甚に存ずる次第でございます。

平成6年3月31日

筑紫野市教育委員会  
教育長 永渕 正敏

# 例 言

1. 本書は都市計画道路建設に伴い、筑紫野市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、筑紫野市より予算の執行委任を受け実施した。
3. 発掘に係る遺構ごとの実測・写真撮影は奥村俊久・向田雅彦が行った。そのほか、全体の空中写真測量を株式会社パスコに委託した。また、遺物写真については「フォトハウスおか」に委託した。
4. 製図は森田くみ子が担当したほか、東亜建設技術株式会社に委託した。
5. 本書の執筆・編集は奥村が行った。
6. 遺構記号は、住居跡＝S J、竪穴状遺構＝S T、木棺墓＝S M、貯蔵穴＝S C、土塋＝S D、段状遺構＝S S、ピット＝S Pとする。

## 目 次

|            | 頁  |
|------------|----|
| I 調査に至る経過  | 1  |
| II 位置と環境   | 2  |
| III 遺構の内容  | 5  |
| IV 出土遺物の内容 | 28 |
| V まとめ      | 37 |

## 挿 図 目 次

|                               | 頁    |
|-------------------------------|------|
| 第1図 脇田遺跡周辺遺跡分布地図（縮尺1/25,000）  | 3    |
| 第2図 脇田遺跡周辺の発掘調査（縮尺1/5,000）    | 4    |
| 第3図 脇田遺跡第3次発掘調査遺構配置図（縮尺1/500） | 折り込み |
| 第4図 3号住居跡実測図（縮尺1/80）          | 5    |
| 第5図 4号住居跡実測図（縮尺1/80）          | 6    |
| 第6図 9号住居跡実測図（縮尺1/80）          | 7    |

|      |                                     |    |
|------|-------------------------------------|----|
| 第7図  | 10号住居跡実測図（縮尺1/60）                   | 8  |
| 第8図  | 11号住居跡実測図（縮尺1/80）                   | 9  |
| 第9図  | 12号住居跡実測図（縮尺1/80）                   | 10 |
| 第10図 | 13号住居跡実測図（縮尺1/80）                   | 11 |
| 第11図 | 1号・2号竪穴状遺構実測図（縮尺1/60）               | 12 |
| 第12図 | 3号竪穴状遺構実測図（縮尺1/40）                  | 13 |
| 第13図 | 2号・3号・4号・5号貯蔵穴実測図（縮尺1/40）           | 15 |
| 第14図 | 6号・7号・8号・9号貯蔵穴実測図（縮尺1/40）           | 16 |
| 第15図 | 10号・11号・12号貯蔵穴実測図（縮尺1/40）           | 17 |
| 第16図 | 13号・14号・15号貯蔵穴実測図（縮尺1/40）           | 18 |
| 第17図 | 16号・18号貯蔵穴実測図（縮尺1/60）               | 19 |
| 第18図 | 17号貯蔵穴、8号土壙実測図（縮尺1/60）              | 20 |
| 第19図 | 4号・5号・6号・7号土壙実測図（縮尺1/40）            | 21 |
| 第20図 | 9号・10号・11号・13号土壙実測図（縮尺1/60）         | 22 |
| 第21図 | 12号土壙実測図（縮尺1/20）                    | 23 |
| 第22図 | 14号・15号・16号・17号土壙、19号貯蔵穴実測図（縮尺1/80） | 24 |
| 第23図 | 1号・2号木棺墓実測図（縮尺1/30）                 | 25 |
| 第24図 | 30001号・30002号ピット実測図（縮尺1/20）         | 26 |
| 第25図 | 住居跡出土遺物実測図（縮尺1/4）                   | 28 |
| 第26図 | 住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）                   | 29 |
| 第27図 | 竪穴状遺構出土遺物実測図（縮尺1/4）                 | 30 |
| 第28図 | 貯蔵穴出土遺物実測図（縮尺1/4）                   | 31 |
| 第29図 | 土壙出土遺物実測図（縮尺1/4）                    | 32 |
| 第30図 | 土壙出土遺物実測図（縮尺1/3）                    | 33 |
| 第31図 | 土壙出土遺物実測図（縮尺1/3）                    | 33 |
| 第32図 | 木棺墓出土遺物実測図（縮尺1/2）                   | 34 |
| 第33図 | ピット出土遺物実測図（縮尺1/3）                   | 35 |
| 第34図 | 段状遺構出土遺物実測図（縮尺1/4）                  | 36 |

## 付 図

付図 脇田遺跡第2次・第3次発掘調査遺構配置図接合図（縮尺1/200）

## 図 版 目 次

- 図版 1 脇田遺跡 B 地区全景
- 図版 2 3号住居跡・4号住居跡・9号住居跡・10号住居跡
- 図版 3 11号住居跡・1号竪穴状遺構・2号竪穴状遺構・3号竪穴状遺構
- 図版 4 2号貯蔵穴・3号貯蔵穴・5号貯蔵穴・6号貯蔵穴
- 図版 5 7号貯蔵穴・9号貯蔵穴・10号貯蔵穴・12号土壙
- 図版 6 12号貯蔵穴・13号貯蔵穴・14号貯蔵穴・15号貯蔵穴
- 図版 7 16号貯蔵穴・18号貯蔵穴・19号貯蔵穴・4号土壙
- 図版 8 4号土壙・6号土壙・8号土壙・15号土壙
- 図版 9 10号土壙・11号土壙・12号土壙・12号土壙遺物出土状況
- 図版10 14号土壙・1号木棺墓・2号木棺墓・30002号ピット
- 図版11 挿図遺物番号17・28・29・30・31・32
- 図版12 挿図遺物番号38・42・43・48・49・50・51・57・58・59
- 図版13 挿図遺物番号60・61・62・67・68・70・77・78
- 図版14 挿図遺物番号52・53・54・55・56

## I 調査に至る経過

昭和61年11月15日付け61筑都第435号で筑紫野市都市計画課から筑紫野市教育委員会社会教育課に「筑紫野市都市計画道路（3・4・24杉塚塔原線）事業に伴う文化財調査について（要望）」がだされた。これに基づき同月18日に協議を行った。

本事業地は周知の遺跡である脇田遺跡内に所在し、隣地を昭和60年度に発掘調査しており、弥生時代の集落跡関係を中心とした遺構が検出され、これらの遺構が続いていることが推測された。昭和62年3月27日付け61筑都第599号で埋蔵文化財発掘の通知が市教育委員会に提出された。市教育委員会では62筑教社第12号で福岡教育事務所に進達した。

昭和62年4月24日、福岡県教育庁福岡教育事務所から、昭和62年4月14日付け62福教社第11-2号で、工事着手前に発掘調査を実施する旨の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」が市教育委員会に到達した。到達後、直ちに筑紫野市長に通知した。

昭和63年度発掘調査を実施することとなり、筑紫野市教育委員会は昭和63年4月1日付け筑教社第45号で発掘調査の通知を行い、発掘作業に着手した。発掘調査にあたっては、筑紫野市長より建設事業費からの調査費の執行委任を筑紫野市教育委員会が受け実施した。

発掘作業は同年8月19日で終了した。

なお、8月7日に発掘調査現場、および地元公民館において説明会を開催した。

発掘調査組織は下記のとおりである。

|           |           |       |                 |
|-----------|-----------|-------|-----------------|
| <b>総括</b> | 筑紫野市教育委員会 | 教育長   | 松田康雄（発掘当時）      |
|           |           | 教育長   | 永渕正敏（現任）        |
| <b>庶務</b> | 筑紫野市教育委員会 | 教育部   | 部長 永田晋一（現在）     |
|           |           | 社会教育課 | 課長 川原孝之（発掘当時）   |
|           |           |       | 課長 黒田未宣（現任）     |
|           |           | 文化財係  | 係長 山野洋一         |
| <b>庶務</b> | 筑紫野市教育委員会 | 教育部   | 主事 奥村俊久         |
| <b>調査</b> | 筑紫野市教育委員会 | 社会教育課 | 文化財係 主事 奥村俊久    |
|           |           |       | 嘱託 向田雅彦         |
|           |           |       | （現在 鳥栖市教育委員会技師） |

## II 位置と環境

筑紫野市は福岡市と久留米市のほぼ中央に位置する。東から三郡山塊、西から脊振山塊が迫り、その間に狭長な筑紫野の平野がある。この平野は北に福岡平野、南に筑紫平野を望み、また、博多湾と有明海へ注ぐ河川の分水嶺ともなっている。一つは鷲田川で、御笠川と合流、板付遺跡を西岸に眺め、博多湾へ注ぐ。もう一つは、宝満川で、永岡遺跡、峰遺跡、津古遺跡、横隈山遺跡、ほか数多くの弥生時代の遺跡を両岸に見ながら下り筑後川に合流し、有明海に注ぐ。

脇田遺跡は脊振山塊の東北端、北側裾部に位置する。今回の調査地点からは、天拝山を背景に、大野城、大宰府政庁、観世音寺、水城等の大宰府関連の遺跡を一望することができる。

脇田遺跡は、これまで2度の発掘調査を実施しているが<sup>註1</sup>、その地形から標高62.7mを頂部とする小山とその北裾から延びる標高40m余りの低台地に分けており、後者をA地区、前者をB地区としている。A地区は昭和57年度に発掘調査を実施し、5世紀前半代を中心とする時期の竪穴式住居跡7軒、横穴式石室を内部主体とする円墳1基を発掘調査した<sup>註1</sup>。B地区は昭和60年度に、今回発掘調査域の北側隣接地を発掘調査し、竪穴式住居跡8軒、貯蔵穴1基、土壙3基、溝状遺構3条を検出し、遺構の主体は弥生時代と推定され、残りは古墳時代のものが多いと考えられる<sup>註2</sup>。

脇田遺跡の周辺には遺跡も多く、本遺跡の北半分も推定大宰府条坊跡に含まれ、北側300mには杉塚廃寺<sup>註4</sup>や大宰府条坊跡第112次発掘調査地点<sup>註5</sup>、同じく300mほど南側には塔原廃寺<sup>註6</sup>がある。また、遺跡の東側を通る九州縦貫自動車道建設にあたって、剣塚遺跡<sup>註7</sup>、唐人塚遺跡<sup>註8</sup>、桶田山遺跡<sup>註9</sup>、塔原遺跡<sup>註10</sup>など弥生時代から鎌倉時代に至る遺跡が発掘調査されている。

### 註

註1 「脇田遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第9集 1984 筑紫野市教育委員会

註2 「脇田遺跡Ⅱ」筑紫野市文化財調査報告書第13集 1986 筑紫野市教育委員会

註3 「大宰府城郭の研究」鏡山 猛 1928

註4 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ」1974 福岡県教育委員会  
「杉塚廃寺」筑紫野市文化財調査報告書第35集 1979 筑紫野市教育委員会

註5 「大宰府条坊跡第112次発掘調査」筑紫野市文化財調査報告書第31集 1992 筑紫野市教育委員会

註6 「塔原廃寺」福岡県文化財調査報告書第35集 1967 福岡県教育委員会

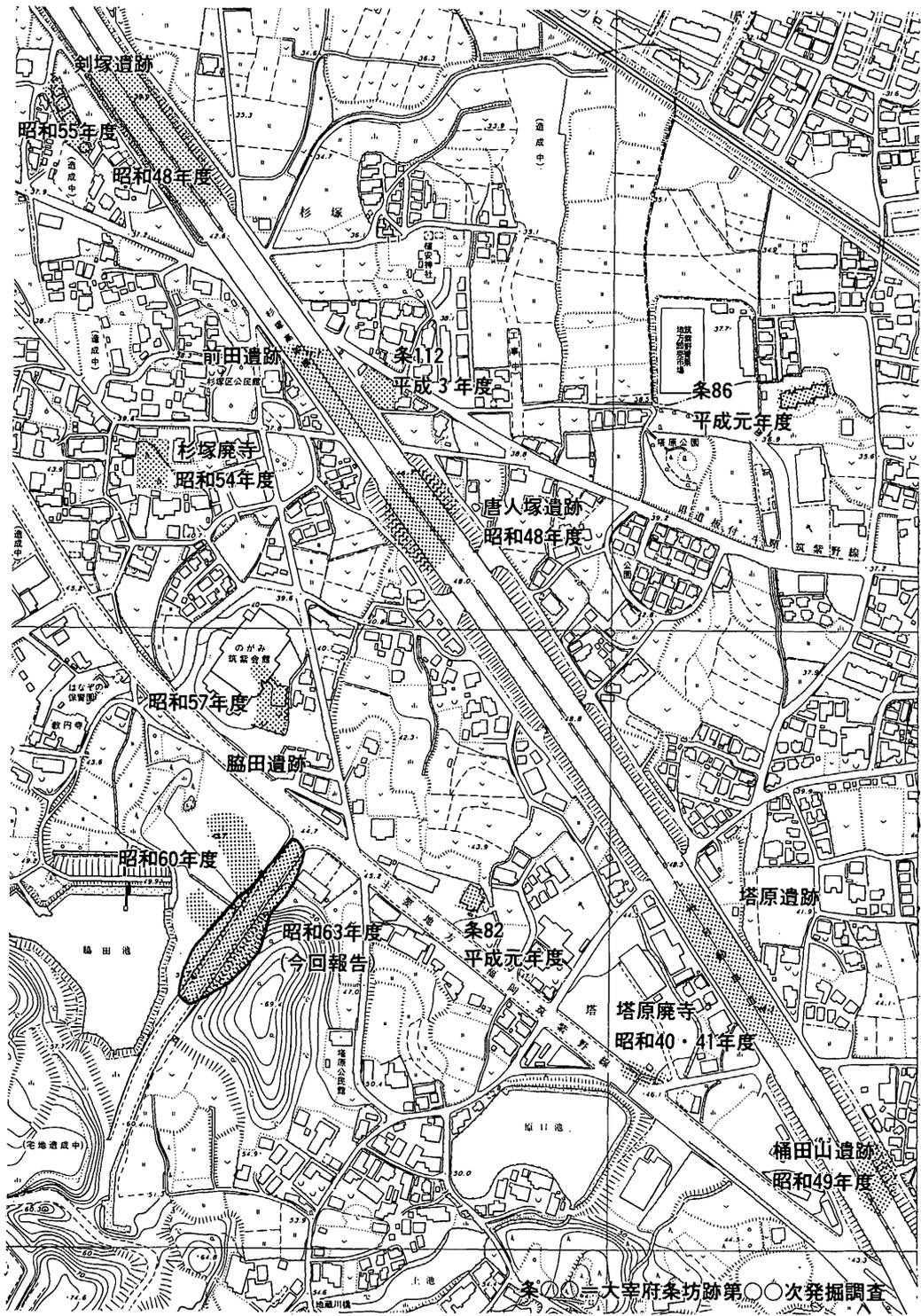
註7 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XXIV」1978 福岡県教育委員会

註8 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XVIII」1977 福岡県教育委員会

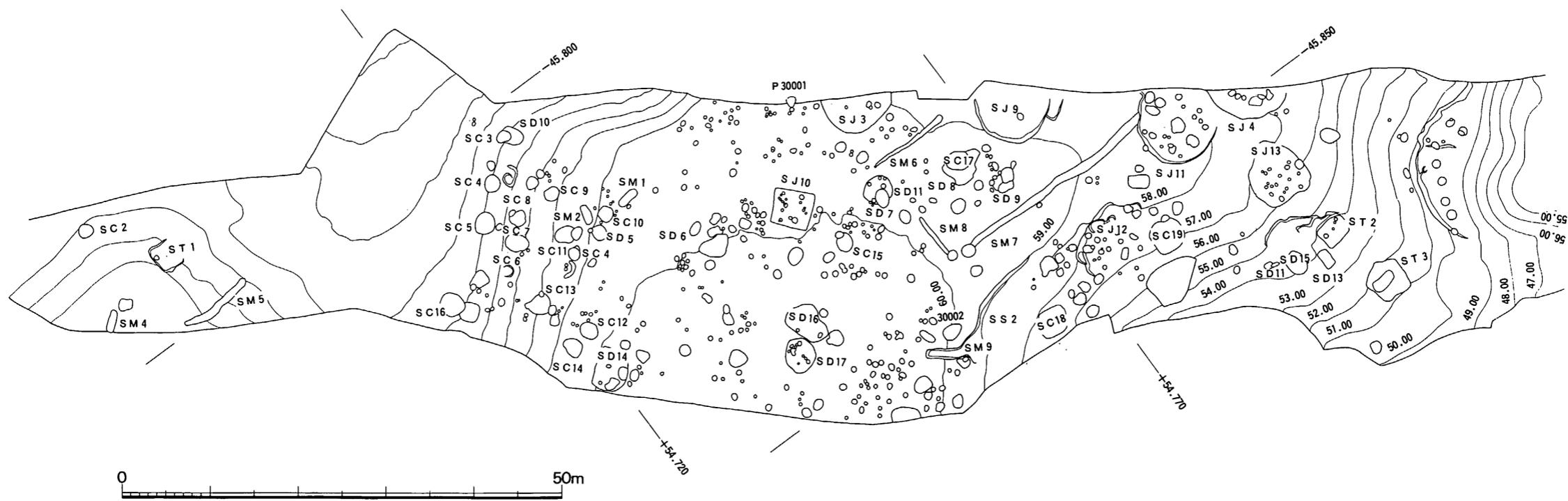
註9 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告VI」1975 福岡県教育委員会

註10 「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ」1974 福岡県教育委員会





第2図 脇田遺跡周辺の発掘調査 (縮尺1/5,000)



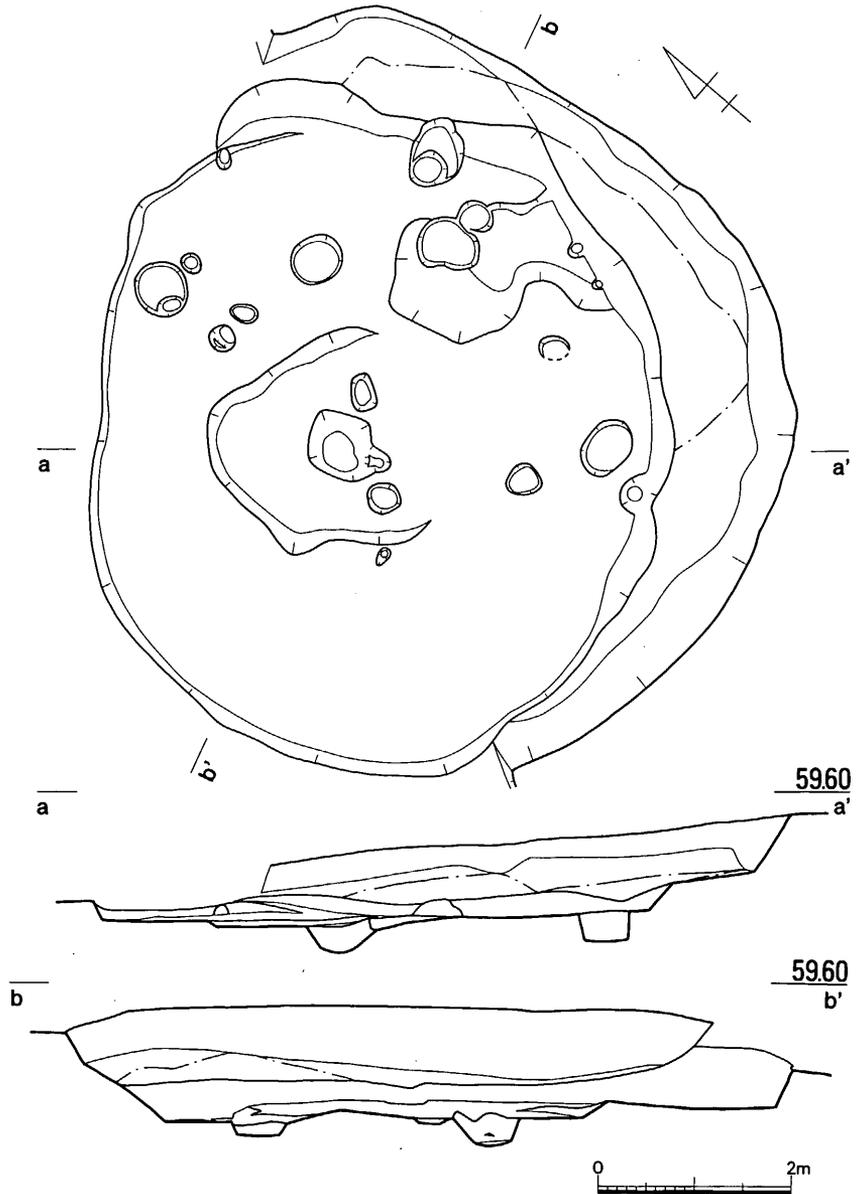
第3図 脇田遺跡第3次発掘調査遺構配置図 (縮尺1/500)

### Ⅲ 遺構の内容

#### 1. 住居跡

##### 3号住居跡 (第4図 図版2)

B地区の小山縁辺は開析され短いいくつかの尾根で形成される。3号住居跡は最も北端に延びる尾根の西に短く延びる尾根の根元に位置する。昭和60年度に北西部の1/2を発掘調査し、残りを今回調査した。壁体は東半部が大きく崩れているが、径6～7mを測る円形プランを呈

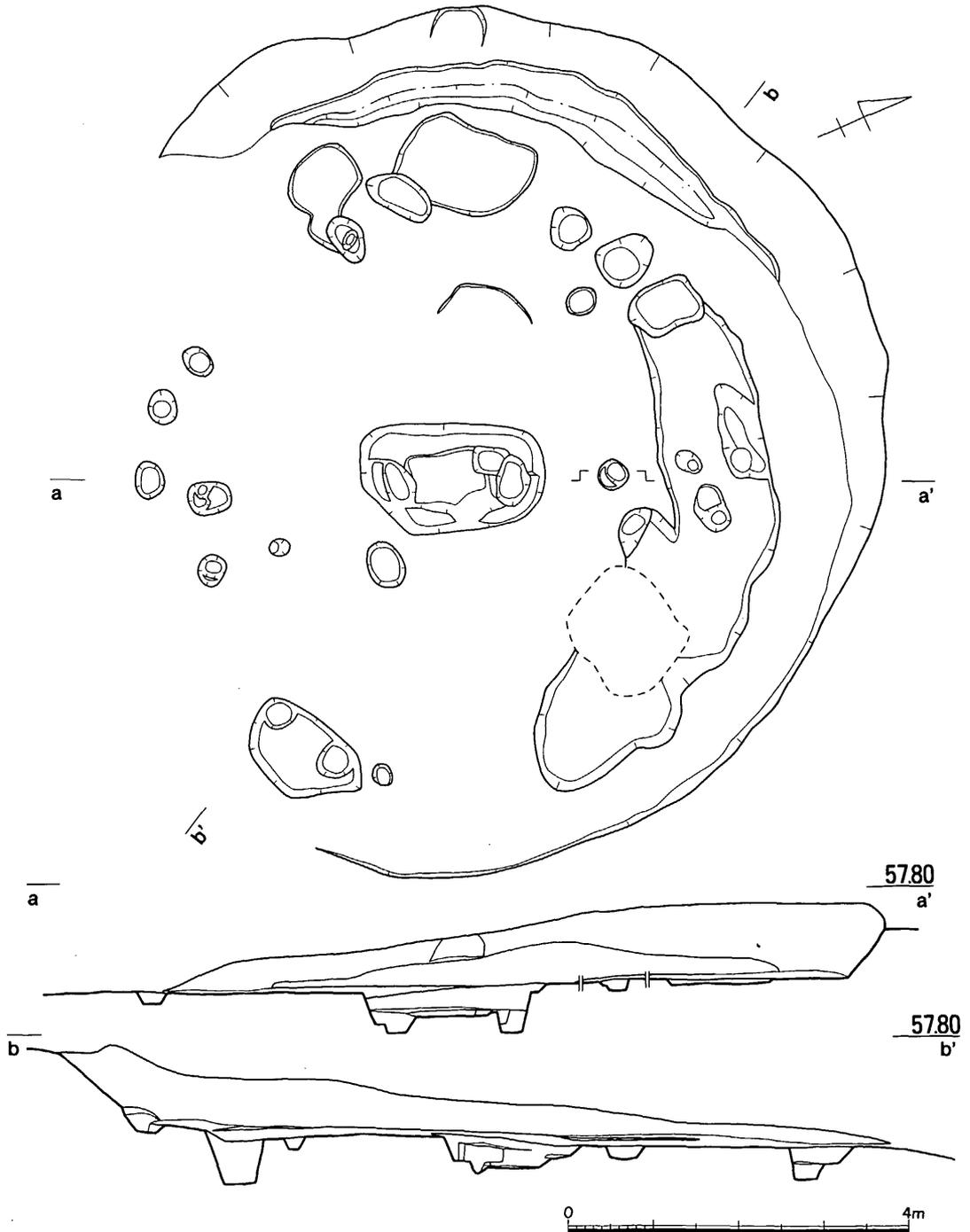


第4図 3号住居跡実測図 (縮尺1/80)

す竪穴式住居跡である。中央部に一辺60~70cm、深さ30cmの略方形を呈す土坑を有す。

#### 4号住居跡 (第5図 図版2)

3号住居跡が検出された尾根の東隣の尾根の根元に位置する。昭和60年度に西側2/3を発掘調査し、残りを今回調査した。北側の1/3程の壁体が失われているが、径約10mの円形プラン



第5図 4号住居跡実測図 (縮尺1/80)

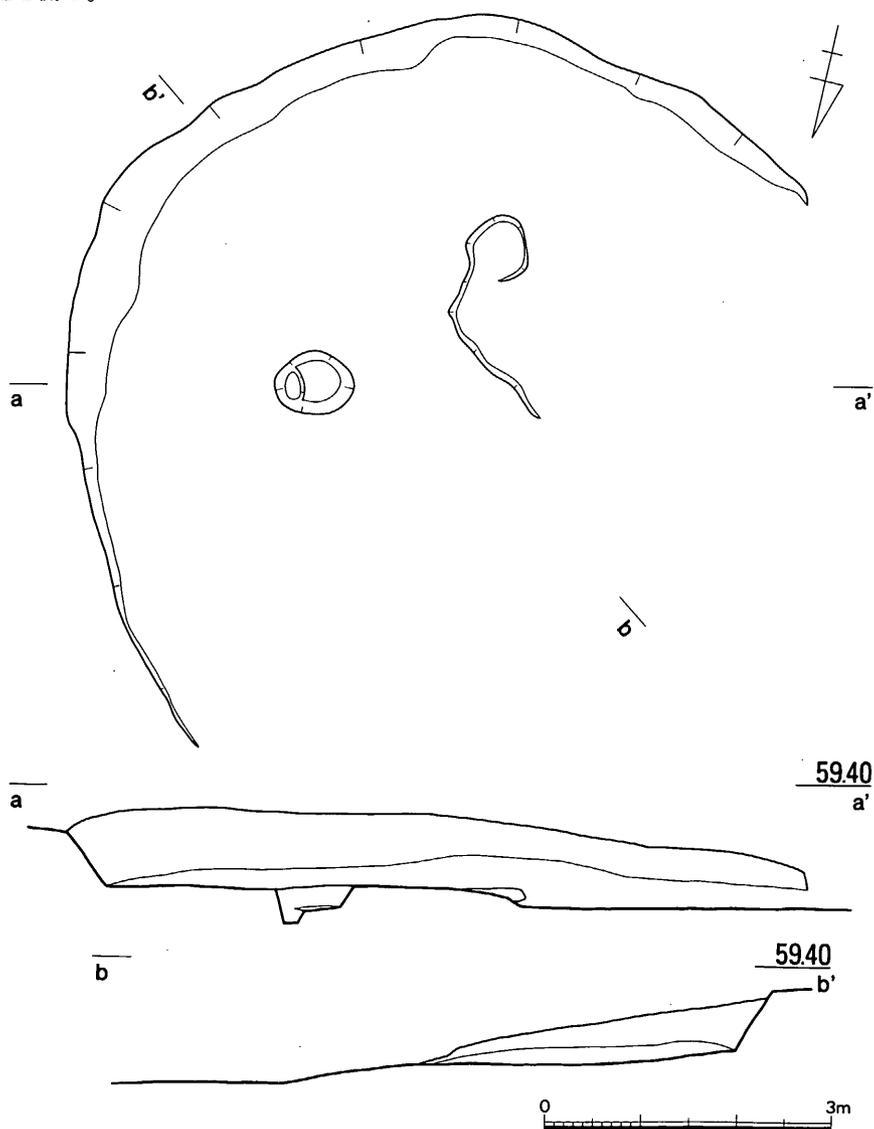
を呈す竪穴式住居跡である。東側壁下に壁溝を検出した。床面中央には2.2×1.3mの長方形プランを呈す土壇を有し、土壇の両端にはピットをもつ。

### 9号住居跡 (第6図 図版2)

3号住居跡と4号住居跡の間、それぞれの尾根に挟まれた谷の最も奥まった位置で検出された。北半の壁体は失われているが、8.5m程と推定される円形プランを呈す竪穴式住居跡である。壁高は最も残りが良いところで60cm余りを測る。

### 10号住居跡 (第7図 図版2)

3号住居跡の南で検出した方形プランを呈す竪穴式住居跡である。一辺3.8~4.5m、壁高20~30cmを測る。



第6図 9号住居跡実測図 (縮尺1/80)

### 11号住居跡 (第8図 図版3)

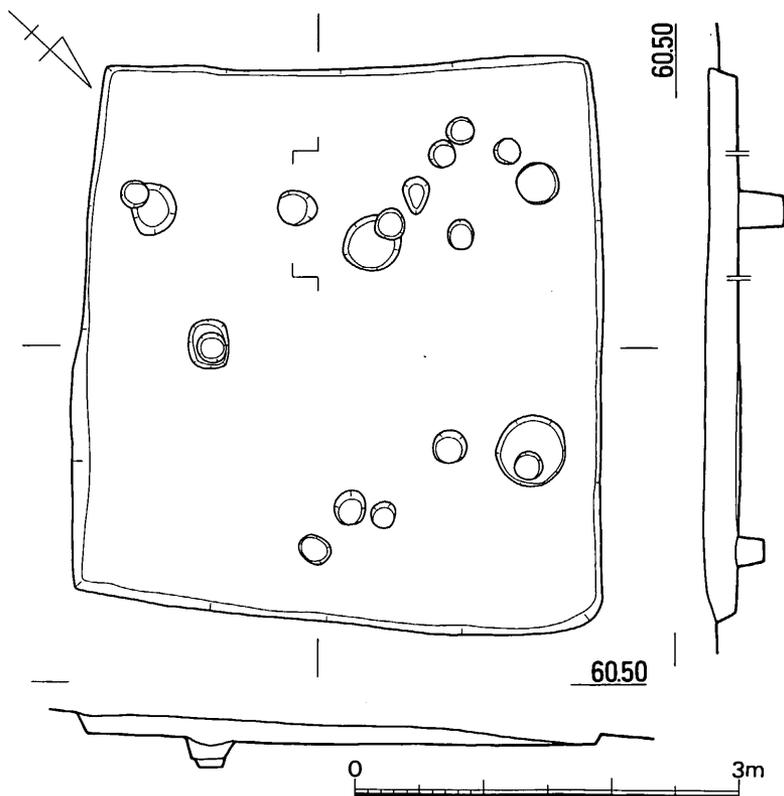
4号住居跡の南隣で検出した。北半は失われているが、径9~9.3m程と推定される円形プランを呈す竪穴式住居跡である。壁高は最も良く残っている部分で約50cmを測る。床面中央よりやや東寄りに150~170cm、深さ20~30cmの不整形プランを呈す土壙を有す。この土壙から2~3m壁体よりに主柱穴6本が巡る。

### 12号住居跡 (第9図)

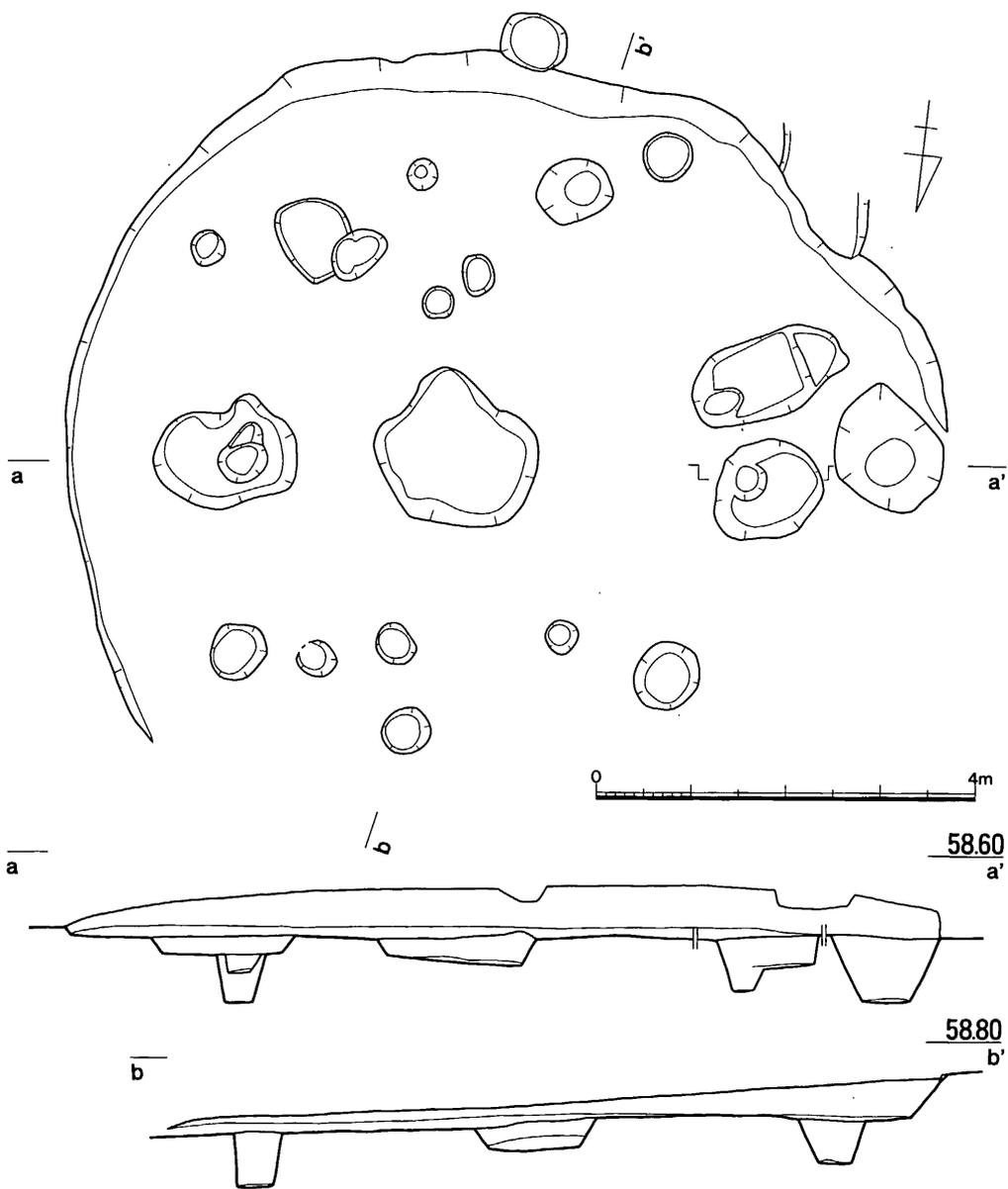
4号住居跡の南側斜面で検出し、壁体の大半が失われている。床面の中央には130×70cm、深さ20~30cmを測る長方形プランを呈す土壙を有し、その外側2~2.5mに8本の主柱穴が巡る。西側ではさらに約1.5m外側に壁体に残り、このことから8~9m程の径をもつ、円形プランを呈す竪穴式住居跡であると推測される。

### 13号住居跡 (第10図)

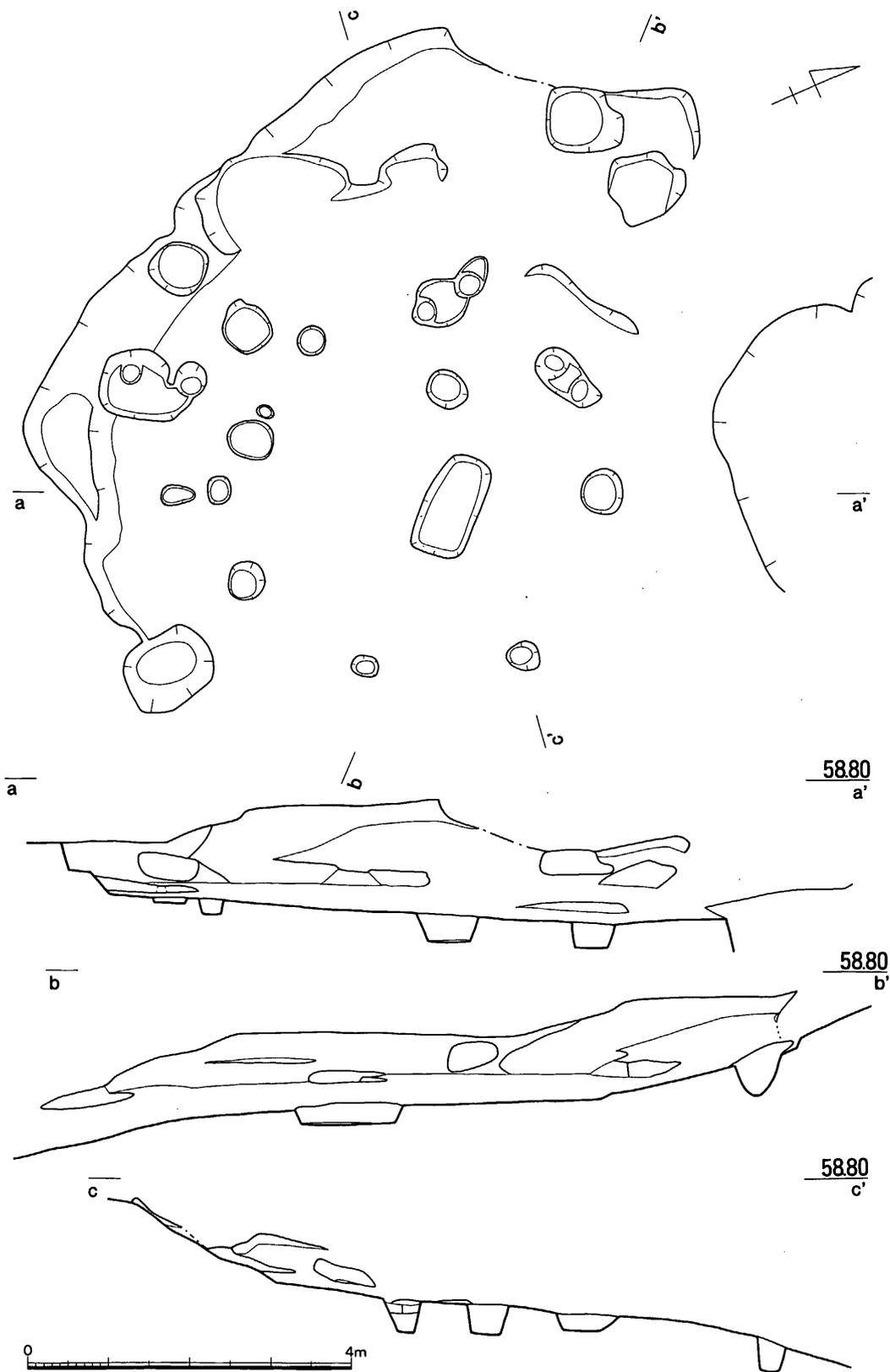
4号、11号住居跡を検出した尾根から東にやや下った斜面で検出した。頂部側の壁体は崩れるが、現況で174cmの比高を測るが、反対側の壁体はほとんど失われている。円形プランに近い方形プランを呈す竪穴式住居跡で、北側の壁下に80×100cmほどの小土壙を有し、主柱穴は4本と考えられる。



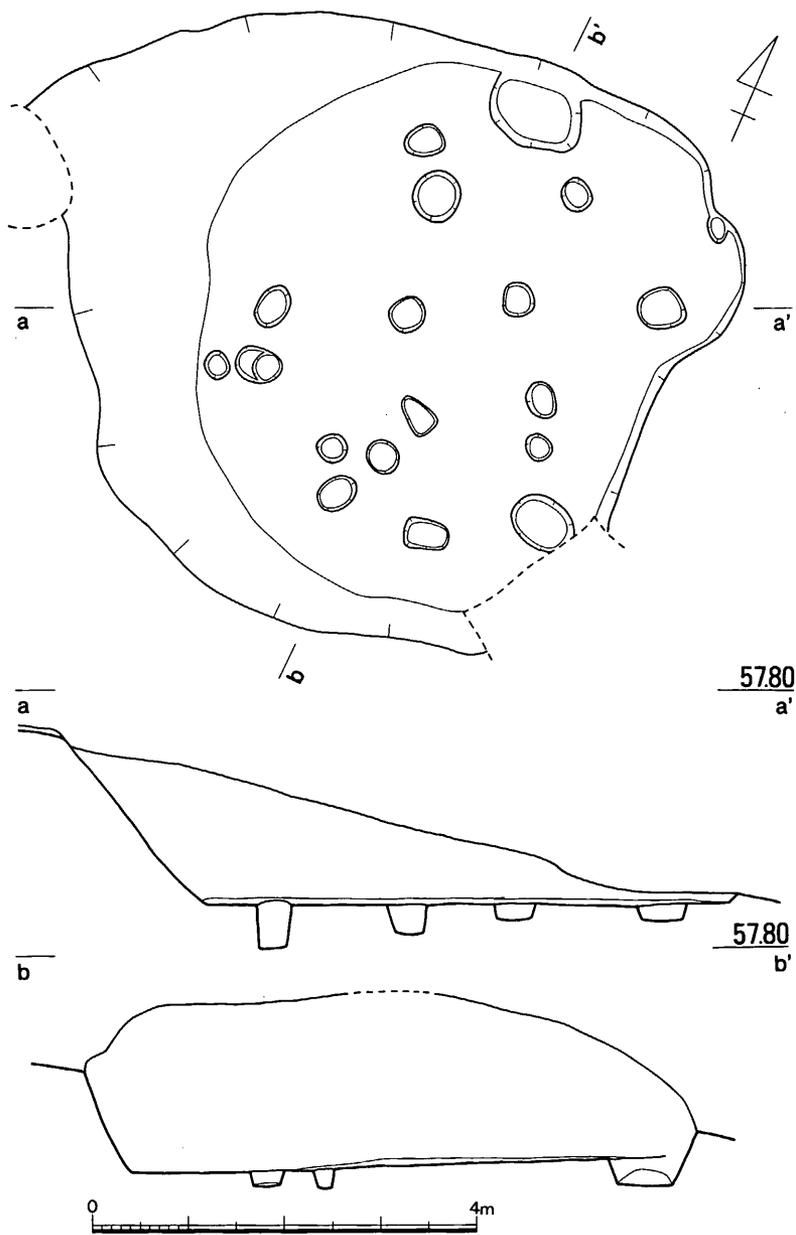
第7図 10号住居跡実測図 (縮尺1/60)



第8图 11号住居跡実測図 (縮尺1/80)



第9图 12号住居跡実測図(縮尺1/80)



第10図 13号住居跡実測図 (縮尺1/80)

## 2. 竪穴状遺構

### 1号竪穴状遺構 (第11図 図版3)

3号住居跡を検出した尾根のさらに西側の短い尾根で検出した。北側の壁体は失われているが、北東のコーナー部分が検出されたことから、 $3.3 \times 3$  m程の方形プランを呈すと考えられる。壁高は最も残りが良い南壁で95cmを測る。床面中央からやや南西寄りに10cm程の浅いピットが検出されたほか、南壁下からも検出された。

### 2号竪穴状遺構

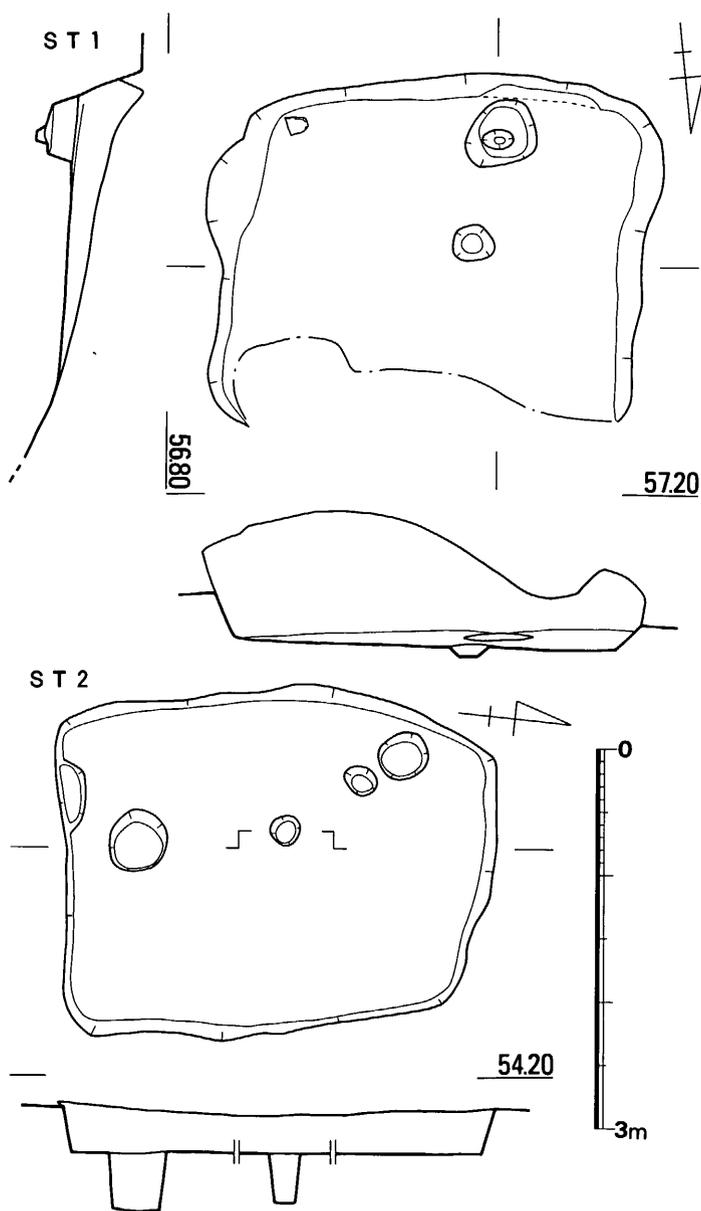
(第11図 図版3)

13号住居跡からさらに下った斜面で検出した。 $3.4 \times 2.7$  m程の方形プランを呈す。壁高は30cm程である。床面中央西寄りに深さ49cmのピットを検出したほか、床面西半に3ピットが検出された。深さは41~47cmを測る。

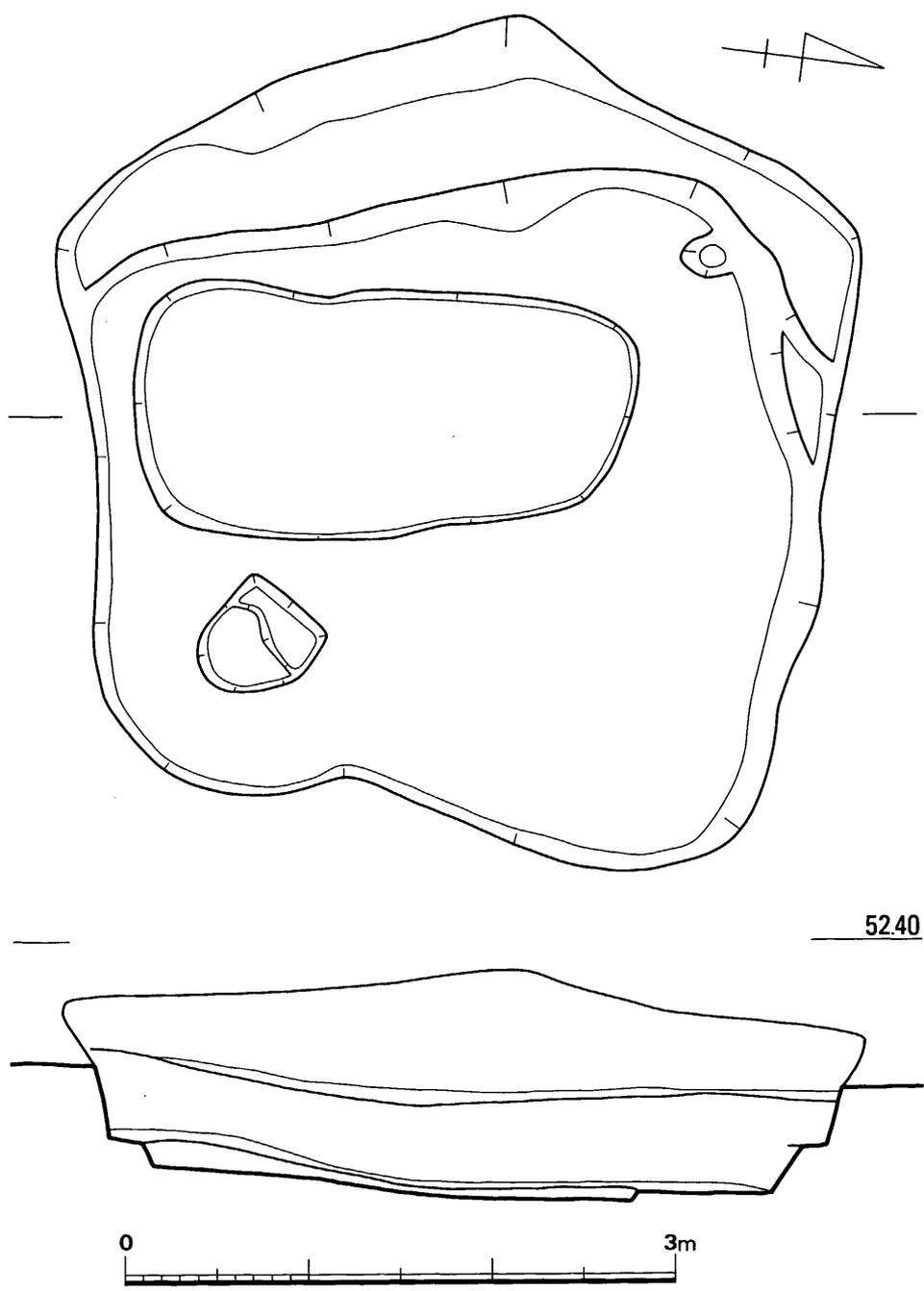
### 3号竪穴状遺構

(第11図 図版3)

2号竪穴状遺構からさらに下った斜面で検出した。西壁は崩れ、段状をなし、床面東端も流失するが、床面は $4 \times 3.5$  m程の方形プランを呈すと考えられる。西側の比高は1.2mを測るが、東側では10cm程である。



第11図 1号・2号竪穴状遺構実測図 (縮尺1/60)



第12図 3号竖穴状遺構実測図（縮尺1/40）

### 3. 貯蔵穴

#### 2号貯蔵穴 (第13図 図版4)

1号貯蔵穴状遺構を検出した短い尾根の先端部斜面で検出した。壁体の残りは悪く、床面は径1.3m程の不整形円形プランを呈す。

#### 3号貯蔵穴 (第13図 図版4)

1号貯蔵穴状遺構や2号貯蔵穴を検出した尾根と、谷を挟み反対の斜面の低い位置で検出した。10号土壌を切る。床面は中央に浅い段をもつ、径1~1.4mを測る不整形楕円形プランを呈す。

#### 4号貯蔵穴 (第13図)

3号貯蔵穴の南東側同レベルで検出した。床面は径1.5~1.6m程の円形プランを呈す。

#### 5号貯蔵穴 (第13図 図版4)

4号貯蔵穴のさらに南東側同レベルで検出したやや大型の貯蔵穴である。床面は径2.2~2.4mの円形プランを呈す。

#### 6号貯蔵穴 (第14図 図版4)

5号貯蔵穴から斜面を約60cm上がった位置で検出した。壁体は崩れているが、床面は径1.1~1.2mの円形プランの谷側部分をさらに15cm余り掘り下げる。

#### 7号貯蔵穴 (第14図 図版5)

6号貯蔵穴の北西側同レベルで検出した。床面近くの壁体は当時の形態を比較的良く残すが、上部は崩れている。床面は径1.2m程の正円形プランを呈し、6号貯蔵穴と同じように谷側部分を浅く掘り下げる。

#### 8号貯蔵穴 (第14図)

7号貯蔵穴の北西側で検出したやや小型の貯蔵穴である。壁体は崩れており、床面は径1m足らずの不整形円形プランを呈す。

#### 9号貯蔵穴 (第14図 図版5)

8号貯蔵穴から40cmほど上がった位置で検出した。壁体は崩れているが、床面は125cm×80cm程の不整形長方形を呈す。

#### 10号貯蔵穴 (第15図 図版5)

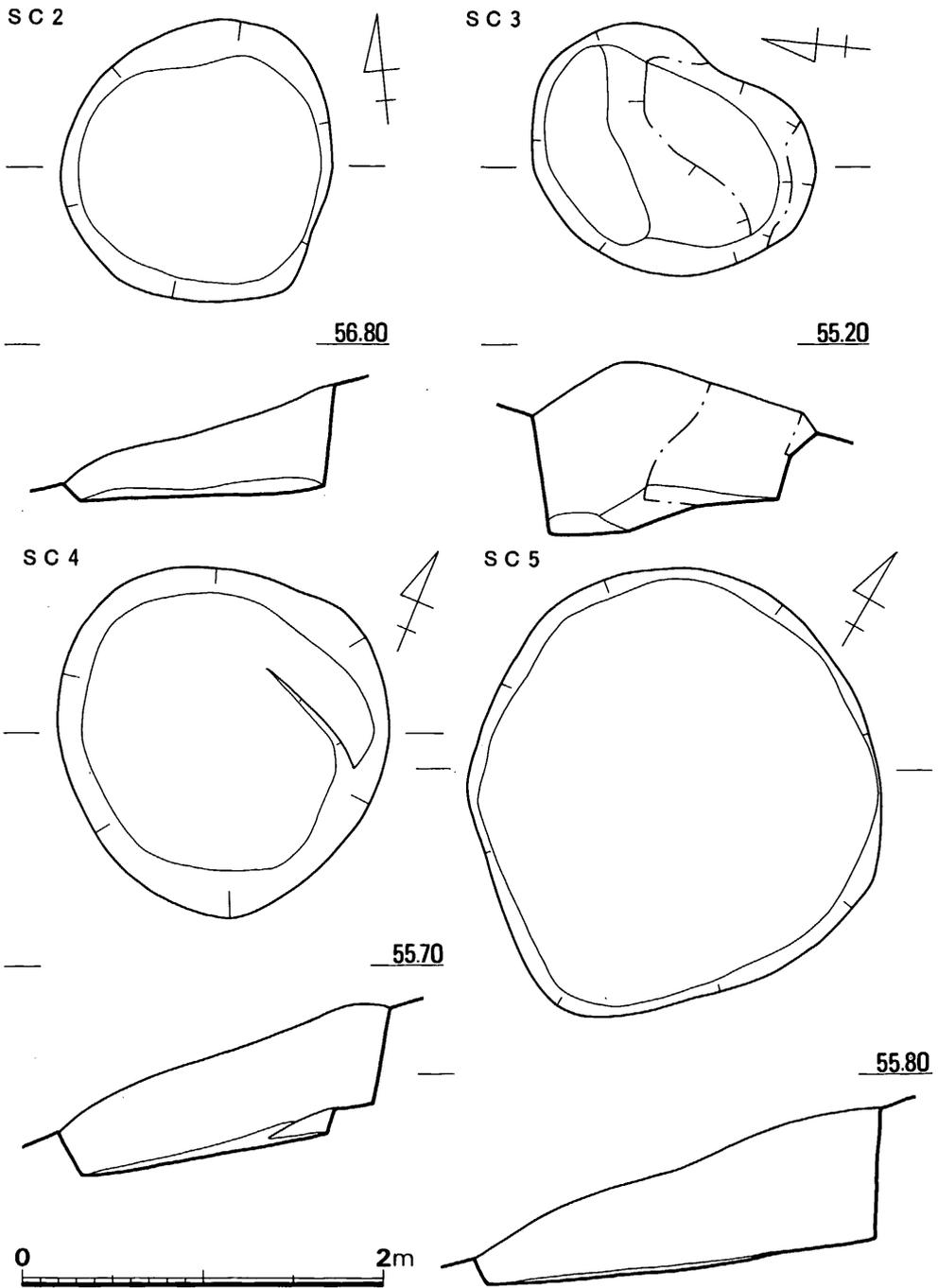
頂部平坦面と斜面の境部分で検出した。床面は1.3×1.4mの不整形長方形プランを呈す。

#### 11号貯蔵穴 (第15図)

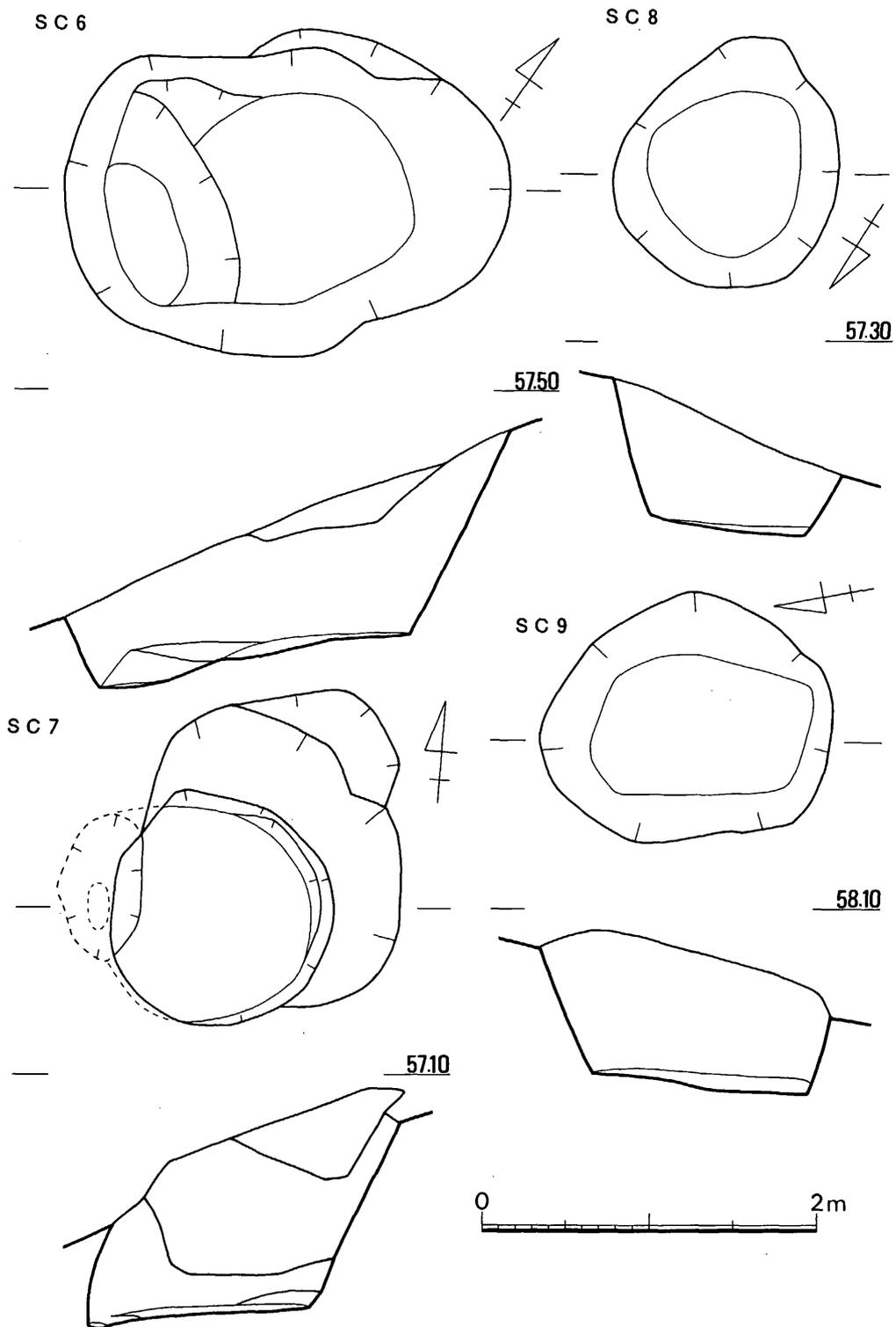
10号貯蔵穴よりやや下った位置で検出した。径1.4~1.2m程の方形に近い円形プランを呈す。

#### 12号貯蔵穴 (第15図 図版6)

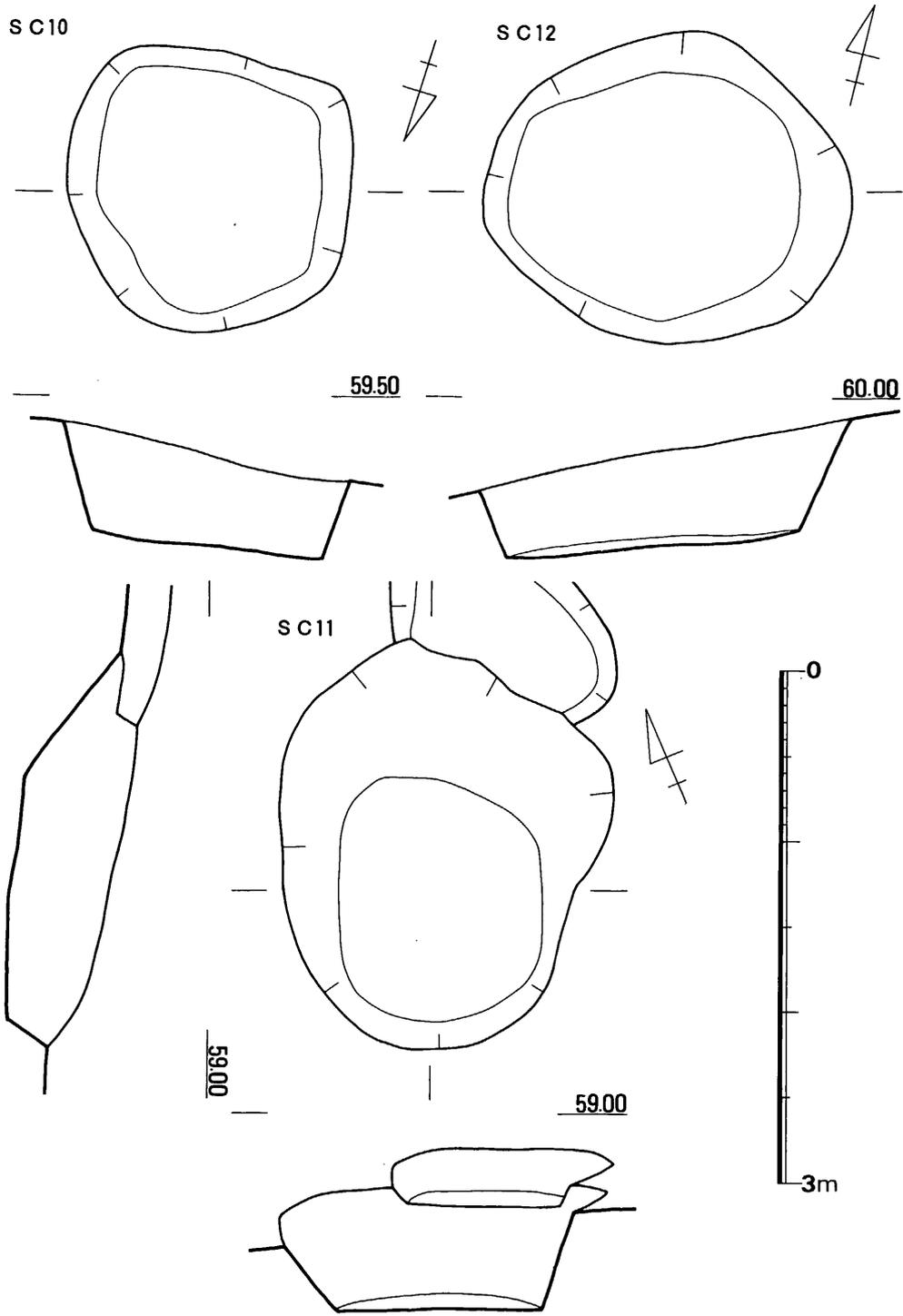
10号貯蔵穴の南東側、頂部平坦面と斜面の境部分で検出した。床面は径1.7~1.5mの円形プランを呈す。



第13图 2号·3号·4号·5号贮藏穴实测图(縮尺1/40)

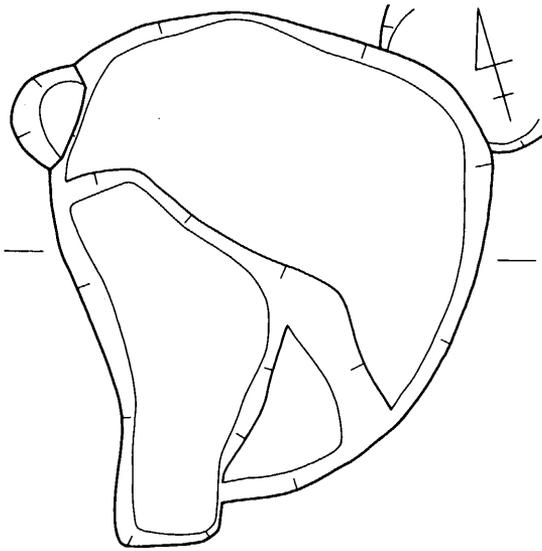


第14图 6号·7号·8号·9号貯藏穴実測図(縮尺1/40)

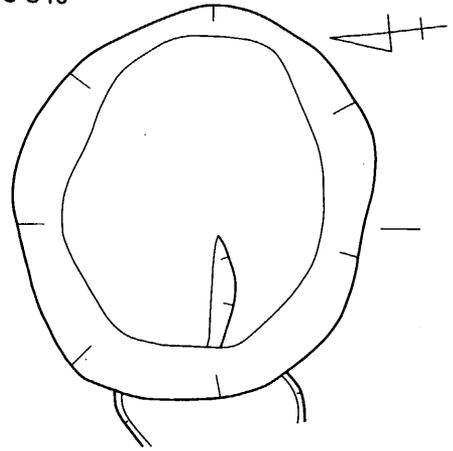


第15図 10号・11号・12号貯蔵穴実測図 (縮尺1/40)

SC13

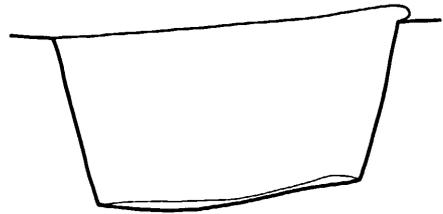
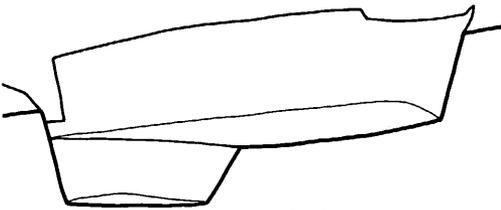


SC15

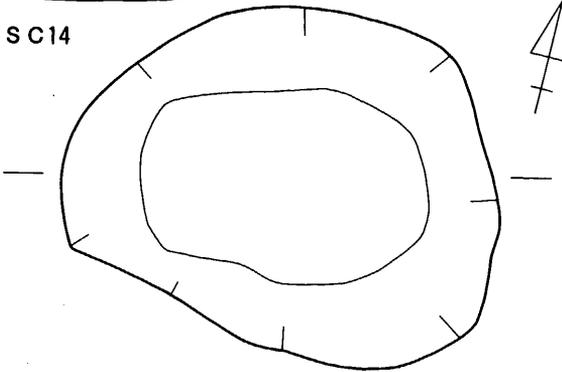


60.50

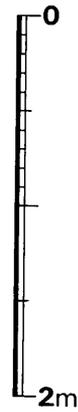
59.00



SC14



60.00

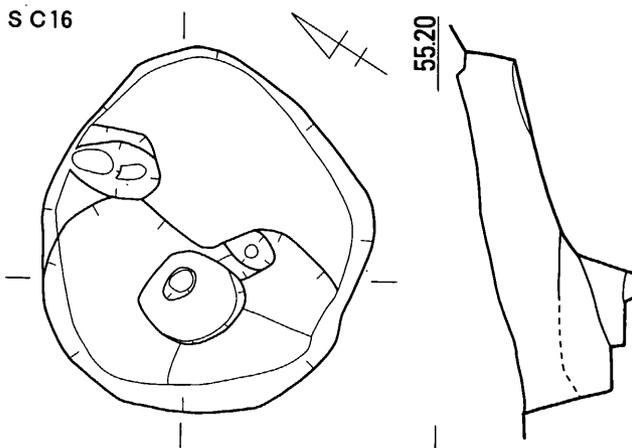


第16图 13号・14号・15号貯藏穴実測図 (縮尺1/40)

**13号貯蔵穴 (第16図 図版6)**

12号貯蔵穴からやや下った位置で検出した。貯蔵穴の東部分はピット等に切られ明確さを欠くが、径2.2~2m程の円形プランを呈す床面と推定される。

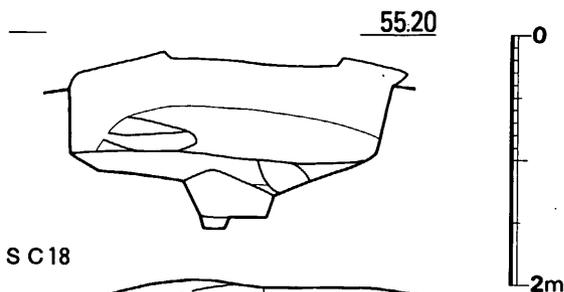
S C 16



**14号貯蔵穴**

(第16図 図版6)

12号貯蔵穴の南隣で検出した。床面1.5×1mの丸みの強い略方形を呈す。

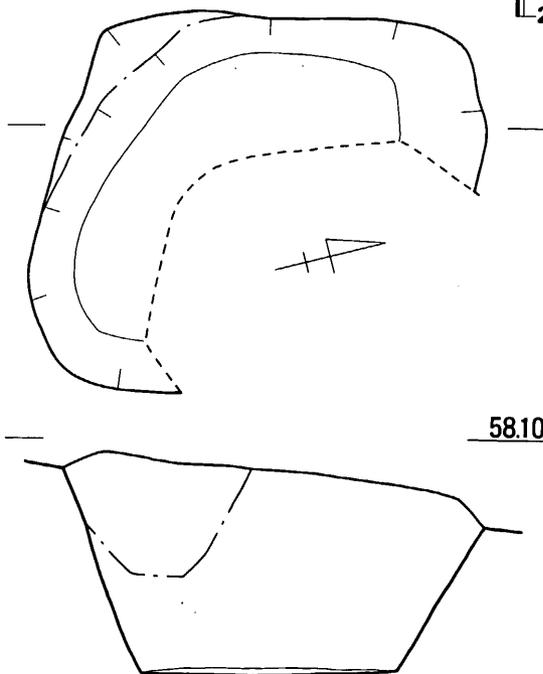


**15号貯蔵穴**

(第16図 図版6)

頂部平坦面のほぼ中央で検出した。床面は径1.6~1.4mの円形プランを呈す。

S C 18



**16号貯蔵穴**

(第17図 図版7)

5号貯蔵穴をさらに南東側同レベルで検出したやや大型の貯蔵穴である。西側を他のピット等に切られるが、径2.6~2.3mの円形プランを呈す床面をもつと推定される。

**17号貯蔵穴**

(第18図)

頂部平坦面を15号貯蔵穴から、北へ緩やかに下った位置で検出した。8

第17図 16号・18号貯蔵穴実測図 (縮尺1/60)

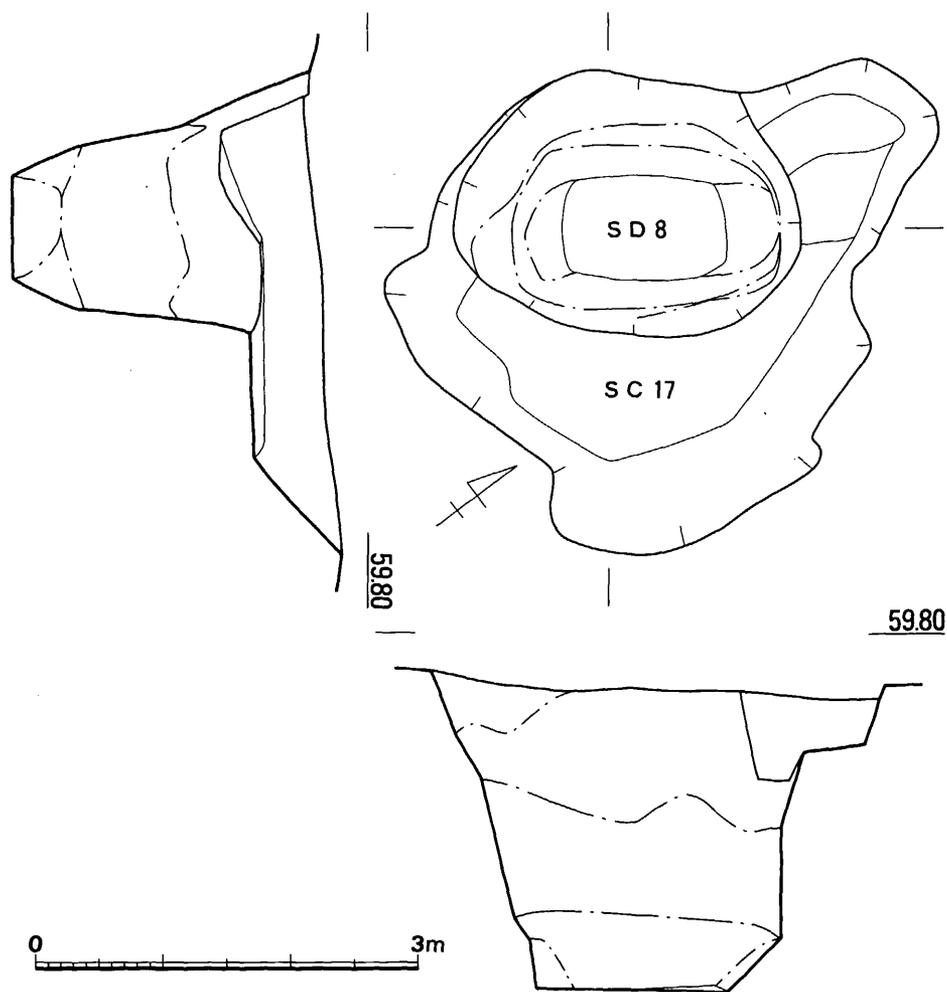
号土壇に切られる。遺構検出面で2.7～2 mの楕円形プランを呈し、床面は130×80cmの長方形プランを呈す。遺構検出面から床面までの深さは最大247cmを測り、周辺遺構の遺存状況から考えると3 m近い深さも推測される。

**18号貯蔵穴 (第17図 図版7)**

3～16号貯蔵穴を検出した斜面と反対側の斜面で、頂部平坦面から2 mほど下った位置で検出した。木の根のため1/3近くが明確ではないが、床面は径3～2 m足らずの楕円形プランを呈すと推定される。

**19号貯蔵穴 (第22図 図版7)**

18号貯蔵穴の北側、ほぼ同レベルの斜面で検出した。床面は2.8×2.4 mの略方形プランを呈す。壁体は崩れているが、頂部側の遺構面との比高差は1.2 mを測る。



第18図 17号貯蔵穴・8号土壇実測図 (縮尺1/60)

#### 4. 土壙

##### 4号土壙 (第19図 図版7・8)

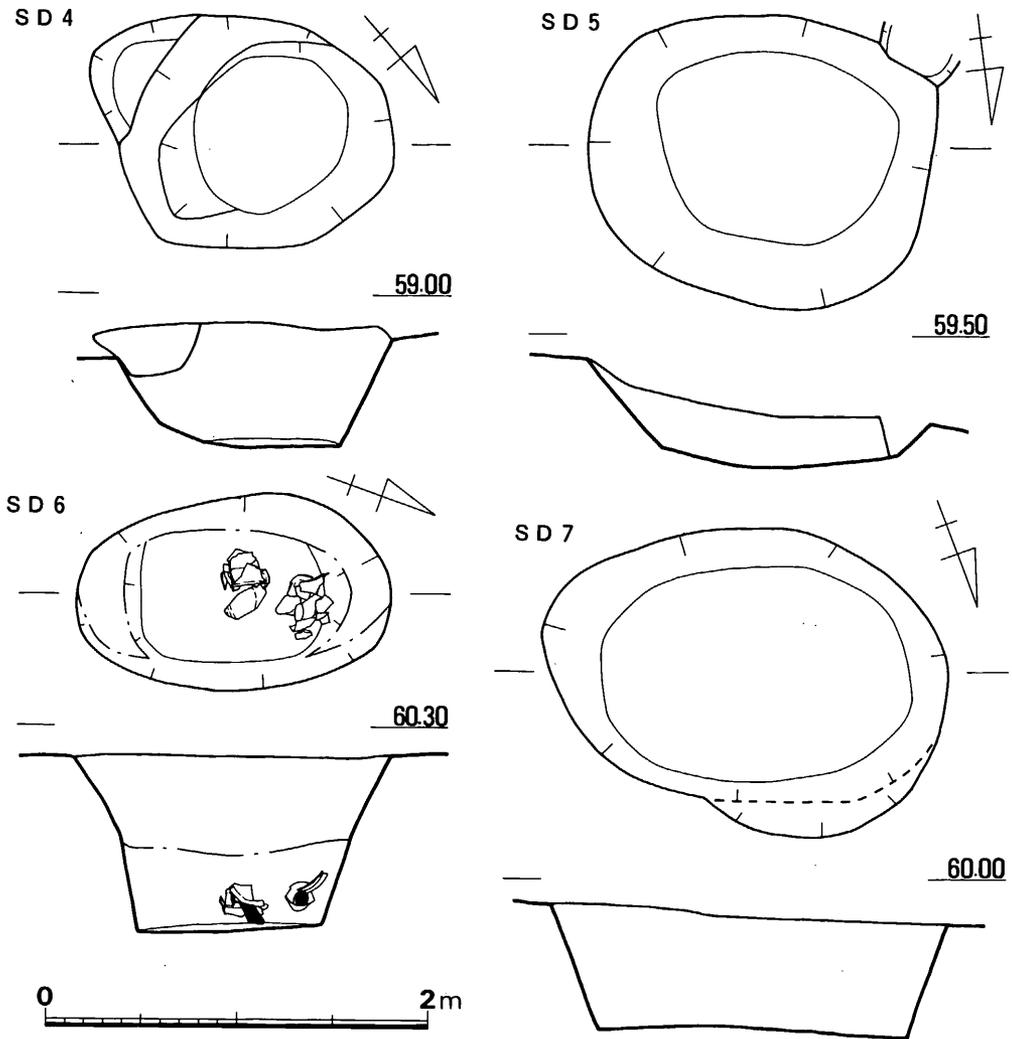
11号土壙の南隣、頂部平坦面と斜面の境部分で検出した。検出面は径1.4~1.3mの楕円形プランを呈し、床面は径80cm程の円形プランを呈す。

##### 5号土壙 (第19図)

4号土壙の北側へ少し上った位置で検出した。検出面は径1.8~1.5mの楕円形プランを呈し、床面は径1.3~1mの略円形プランを呈す。

##### 6号土壙 (第19図 図版8)

頂部平坦面の西部に位置する。検出面は径1.6~1mの楕円形プランを呈し、床面は95~75cm



第19図 4号・5号・6号・7号土壙実測図 (縮尺1/40)

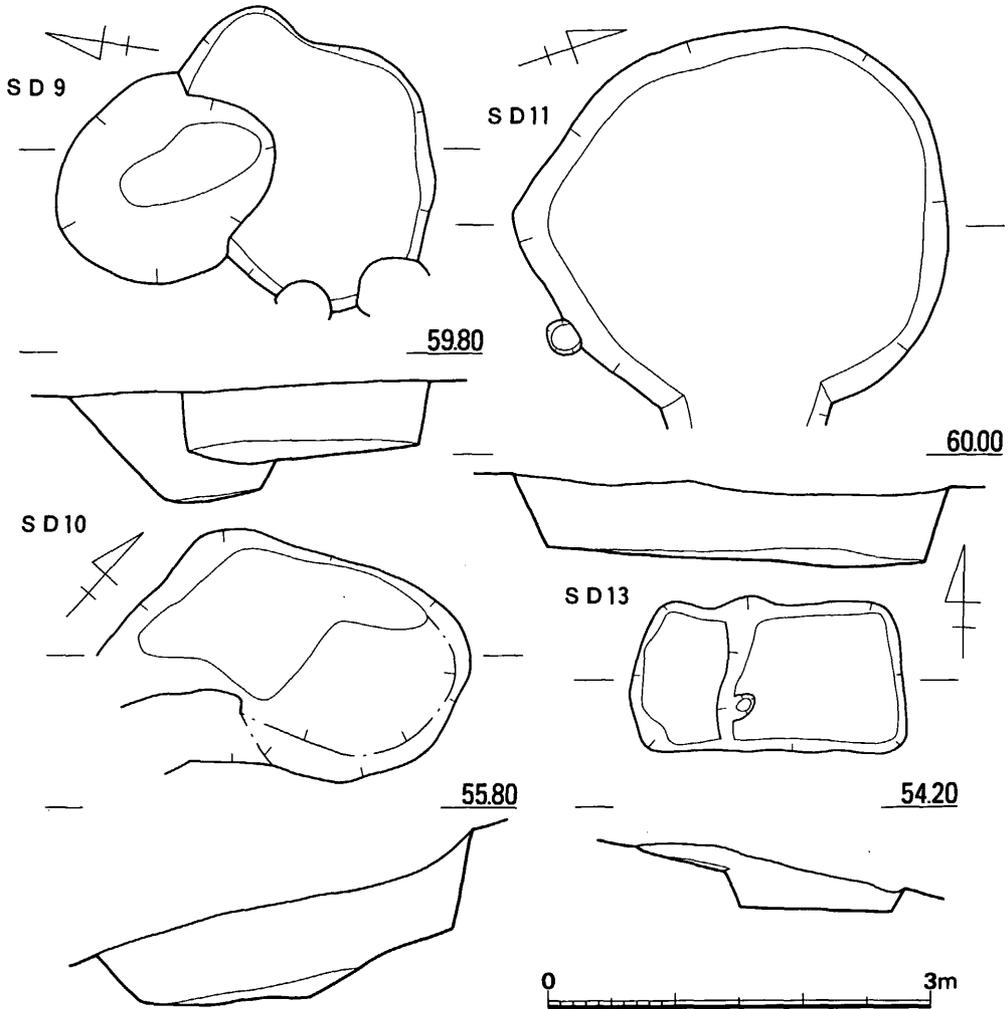
の方形プランを呈す。壁体の3方は床面から40cmのところまでほぼ垂直に近く立ち(長軸両端壁体はやや外傾し、西壁はやや内傾する。)、そこから上部はやや外に開く。東側の壁体のみ遺構面までほぼ直に立ち上がる。この遺構については断面観察をしていないが、外傾する壁体上半部は崩れたものと推測され、東側壁のように真っすぐに立ち上がっていた壁体であろう。また、床面からやや浮いて甕や礫等が出土した。

**7号土壇 (第19図)**

頂部平坦面の北西端に位置し、11号土壇を切る。検出面は径2.1~1.4m、床面は径1.6~1.1mの楕円形プランを呈す。

**8号土壇 (第18図 図版8)**

17号貯蔵穴を切る。遺構面は4.2~3mの不整形プランを呈す。



第20図 9号・10号・11号・13号土壇実測図 (縮尺1/60)

### 9号土壙 (第20図)

8号土壙の北東に位置し、周囲をピットに切られる。遺構面で径2.4~2mの略円形プランを呈す。

### 10号土壙 (第20図 図版9)

3号貯蔵穴に切られる。遺構面で2.5×1.7mの略方形プランを呈す。床面は西寄りに不整形なプランを有す。

### 11号土壙 (第20図 図版9)

頂部平坦面の北西端に位置し、7号土壙に切られる。検出面は径3.4~3m、床面は径3~2.7mの円形プランを呈す。

### 12号土壙 (第21図 図版9)

北東斜面で検出した。検出面では100×80cmの略方形プランを呈す。壁体の大半は削平され、東隅は比較的新しい遺構により切られる。かろうじて残った床面は90×60cm余りで、土師器碗等が置かれていた。

### 13号土壙 (第20図)

12号土壙を北にやや下った位置で検出した。検出面は2.2×1.2mの長方形プランを呈す。西側1/3程の床面約30cmの位置に段を有し、東側の床面は1.2×1mの方形プランを呈す。

### 14号土壙 (第22図 図版10)

12号、14号貯蔵穴の東上で検出した。径4.8~3.8mの不整半円形を呈す。頂部側壁下に1.5×1m、深さ20cm程の小土壙を有す谷側はもう少し床面が続いていたものと推測される。

### 15号土壙 (第22図 図版8)

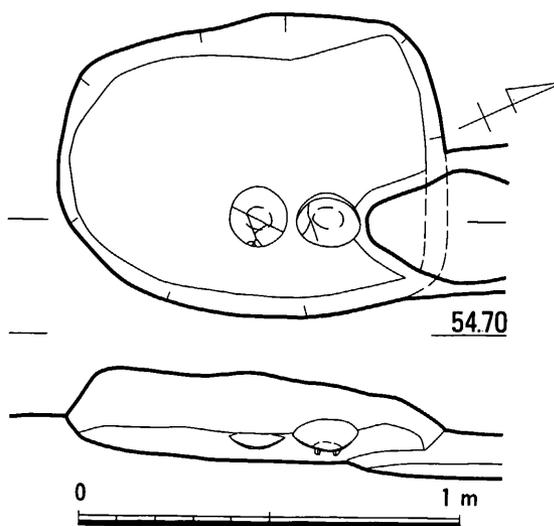
14号土壙の反対側の斜面、12号土壙と13号土壙の間で検出した。検出面は2.5~2m余り、床面は径2.5~2.2mの楕円形を呈す。

### 16号土壙 (第22図)

頂部平坦面の中央部で検出した。5.2~3.6mの不整形なプランを呈す。本来の形態は削平が著しく明確でない。

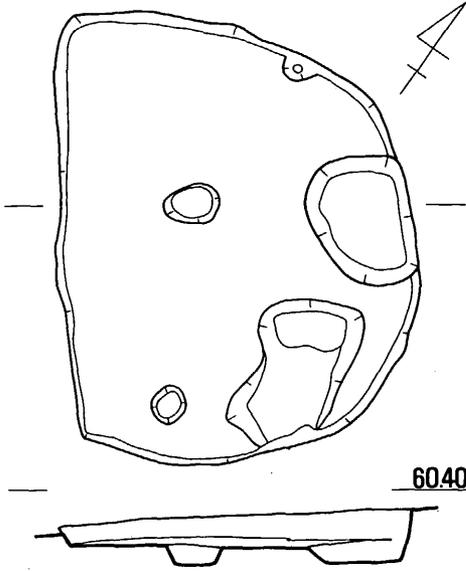
### 17号土壙 (第22図)

16号土壙に隣接して検出した。径4~3.5mの不整円形プランを呈す。床面にピットも見られるが、16号土壙同様、削平が著しく明確でない。



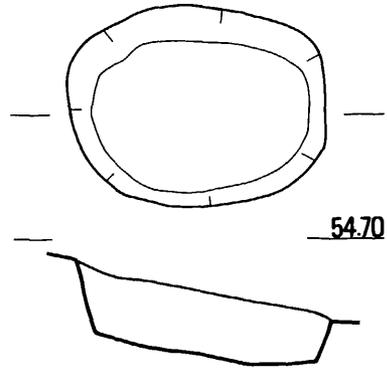
第21図 12号土壙実測図 (縮尺1/20)

SD14



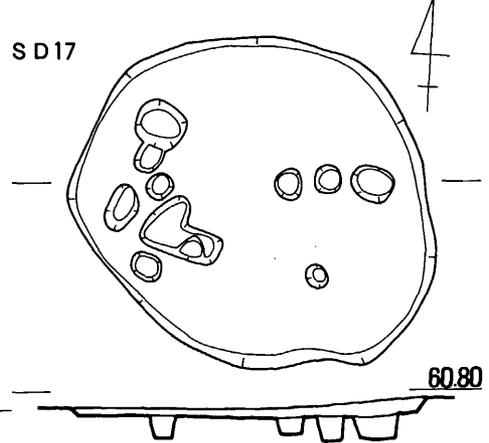
60.40

SD15



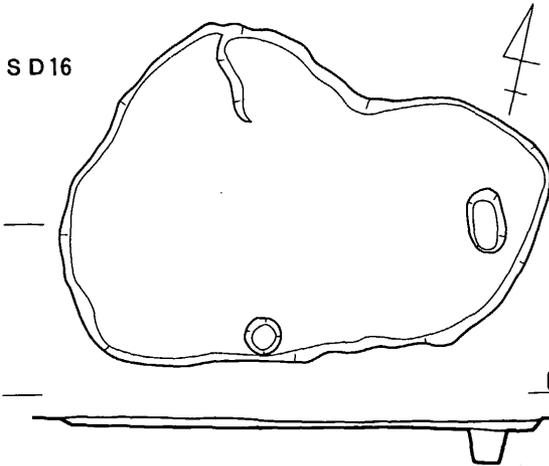
54.70

SD17



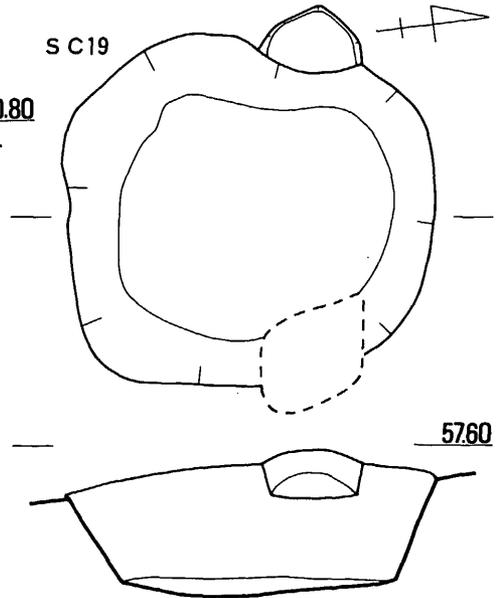
60.80

SD16



60.80

SC19



57.60



第22図 14号・15号・16号・17号土壇、19号貯蔵穴実測図 (縮尺1/80)

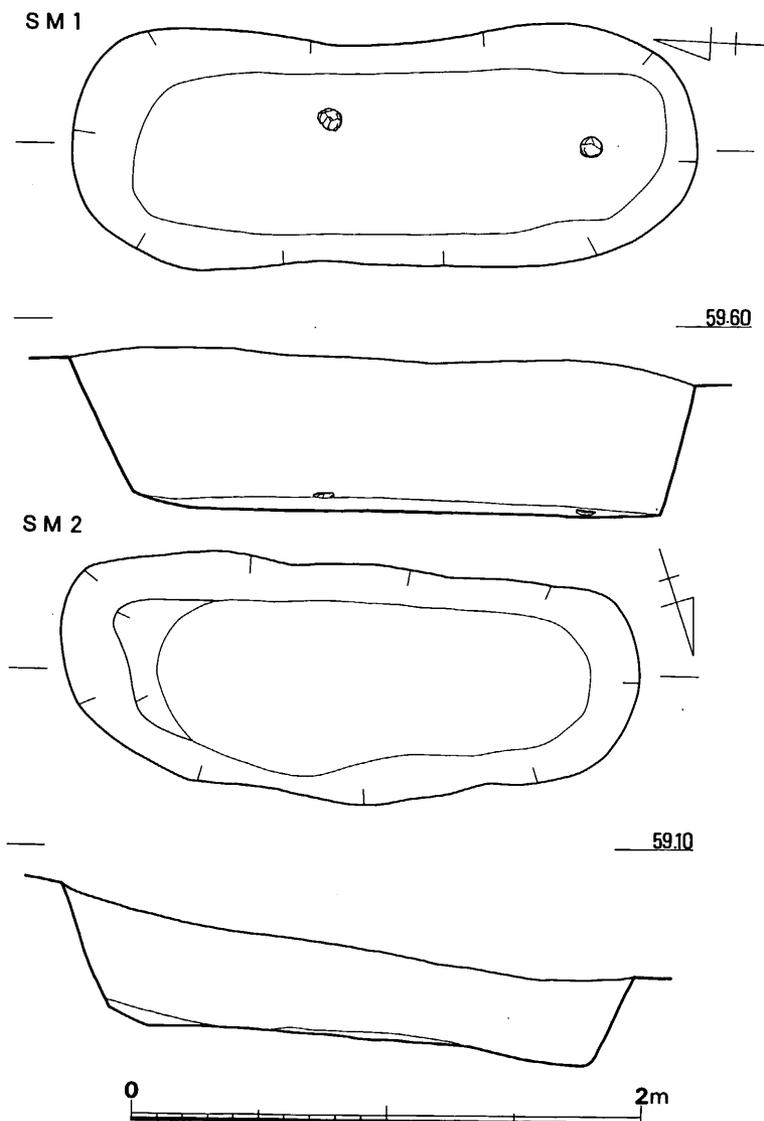
## 5. 木棺墓

### 1号木棺墓 (第23図 図版10)

頂部平坦面西端で検出した。当初、土壙(SD-04)として発掘した。検出面は245×90cm程の長楕円形プランを呈す。木棺の痕跡は検出しえなかったが、釘が出土したため木棺墓と判断した。床面からは土師器の小皿が2点出土した。

### 2号木棺墓 (第23図 図版10)

1号木棺墓から少し下った位置で検出した。1号木棺墓と同様、当初、土壙(SD-02)として発掘した。検出面は225×95cm程の長楕円形プランを呈す。



第23図 1号・2号木棺墓実測図 (縮尺1/30)

## 6. ピット

### 30001号ピット (第24図)

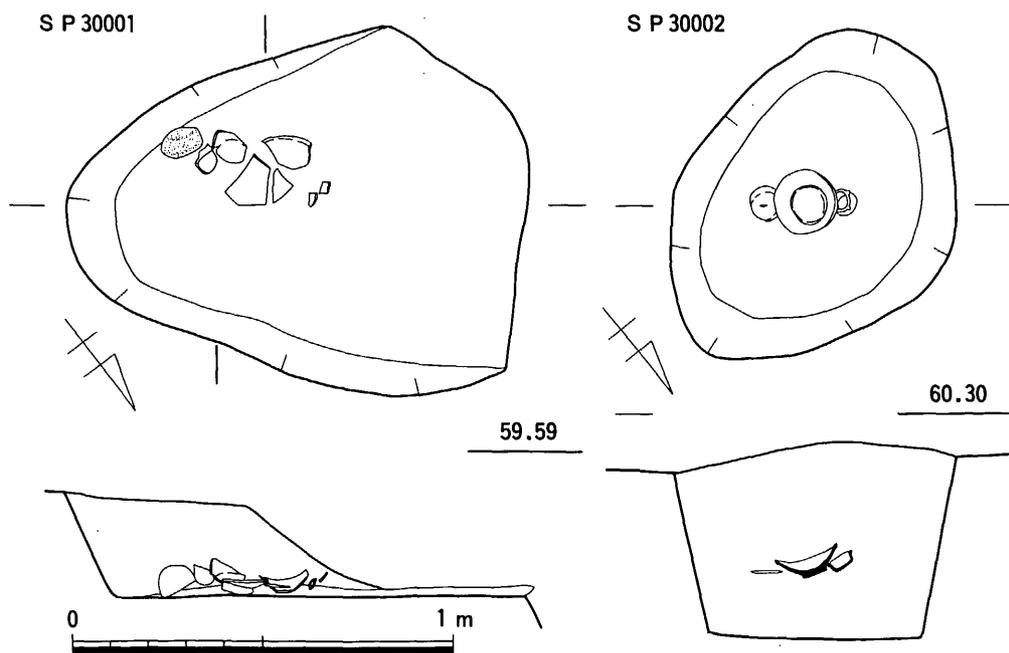
3号住居跡の南西側で検出した。遺構の一方を失うが、床面から弥生中期の土器等が出土した。

### 30002号ピット (第24図 図版10)

9号溝状遺構の北西側で検出した。検出面は径95～70cmの楕円形プランを呈し、深さ50cmを測る。床面から16.7cm浮いて白磁や小形の石鍋等が出土した。

### その他のピット

本調査でピットは住居跡等の内部のピットを除き約400基を検出した。内遺物を出土したピットは109基である。そのほとんどが、弥生式土器の小片である。



第24図 30001号・30002号ピット実測図 (縮尺1/20)

## 7. 溝状遺構

### 4号溝状遺構

最も西側の尾根頂部で検出した。検出した部分は幅90cm、長さ2.5m、深さ25cmを測る。主軸をN-40°-Wにとり、さらに南に延びる。

## 5号溝状遺構

4号溝状遺構と同じ尾根で検出した。頂部から主軸をN-18°-Eにとり、3mほど下り、さらに向きをN-6°-Wに変え、5.5m下る。幅80~90m、深さは中央部が最も深く30cm程である。

## 6号溝状遺構

頂部平坦面から北に緩やかに下る尾根上から6~8号溝状遺構が検出された。6号溝状遺構は全長約4.6mを検出し、幅は最も広い部分で70cmを測る。方位はほぼN-Sにとる。

## 7号溝状遺構

6号溝状遺構の東約13mを平行に走る。頂部側は径1.6~1.4m、深さ50cm程のピット部分から検出し、約24m下り11号住居跡との切り合い部分でロストした。この部分が最も深く約20cmを測る。

## 8号溝状遺構

7号溝状遺構の南に隣接する径1~1.2mのピットから直角に西に走る溝状遺構である。全長約5m、幅約40cm、深さ約17cmを測る。

## 9号溝状遺構

頂部平坦面と東側斜面との境で検出した。主軸をN-38°-Eにとり、斜面側端部は2号段状遺構に続く。

## 8. 段状遺構

### 2号段状遺構

昭和60年の発掘調査で検出した段状遺構を1号段状遺構とする。この1号段状遺構と反対側の斜面を削り出した遺構である。比較的急な斜面であるため土の流失が著しいため明確ではないが、いわゆる造成が行われていたと考えられ、12号住居跡はこの造成面に建てられた住居跡と推測される。

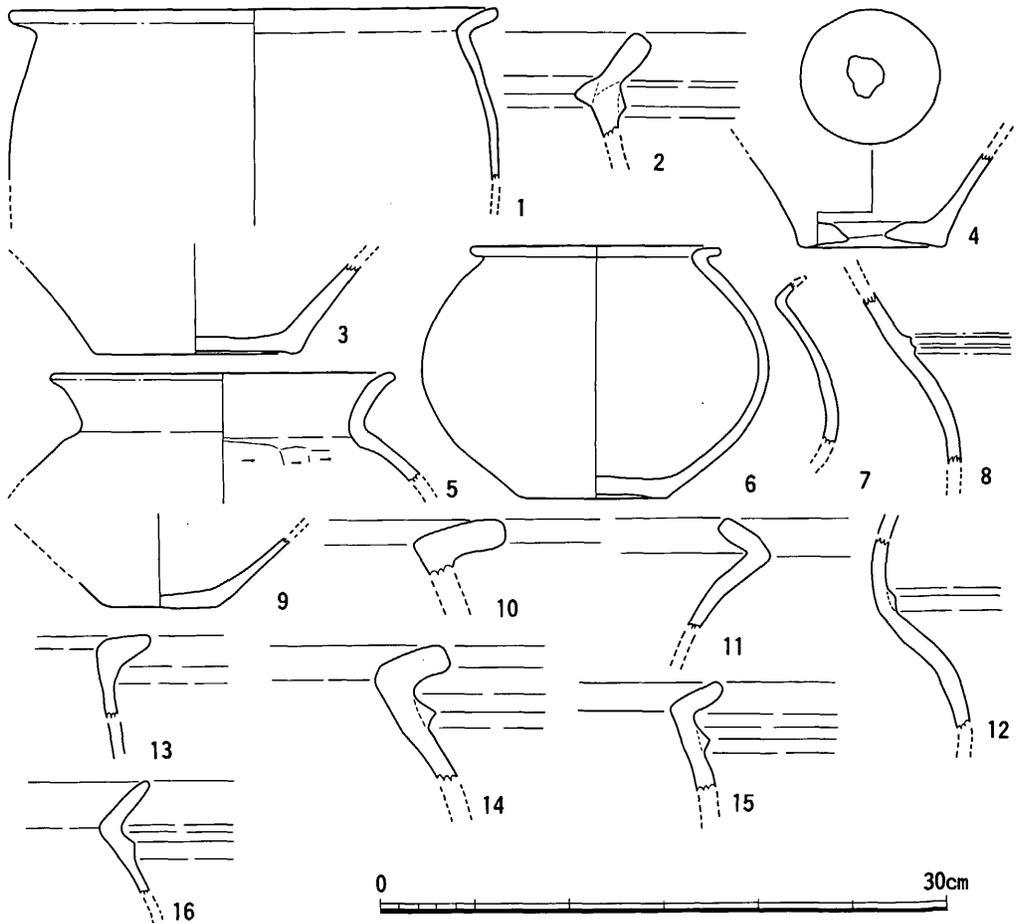
## 9. その他の遺構

調査区の東側斜面低位に半円形に造成を行い7基の墳墓が検出された。造成面埋土から研磨された方柱形の花こう岩墓石片等が出土し、近代のものと考えられる。

## IV 出土遺物の内容

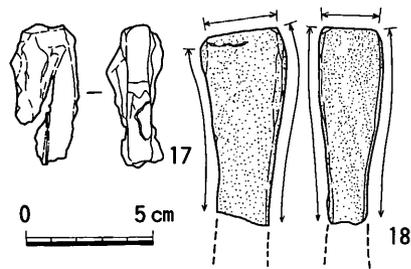
### 1. 住居跡 (第25・26図 図版11)

1～5は3号住居跡から出土したものである。1は甕の上部の破片で、口径25.8cmに復元される。口縁部はく字状に近い逆し字状を呈す。胴部最大径は上位にもつと考えられる。器面は磨滅が著しい。2は甕の口縁部小片で、上方に立ち、内面に僅かにかえりを残す。口縁部直下屈曲部に三角凸帯が巡る。3・4は甕の底部で、底径はそれぞれ11cm、8cmを測る。4はやや上がった底面中央に焼成後に外側から穿孔が施される。5は土師器甕の1/6ほどの口縁部周辺の破片である。口径18.4cmに復元され、胴部内面はヘラ削りされる。6は口縁部が短く外に折れ曲がる無頸壺で、口径13.2cmと推定される。口縁部の残りは15%程で穿孔は確認されなかつ



第25図 住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/4)

た。7も無頸壺の小片で内面に底部より放射状に施される強い指ナデが認められた。8は壺の肩部でコ字状の凸帯が1条巡る。9は壺の底部で、底径6cmを測り、外面に丹が認められる。ほかに3号住居跡からは、やや小振りのパンコンテナーに3/4程の土器が出土している。ほとんどは胴部の小片である。10～12は4号住居跡から出土した。10は逆L字状を呈す口縁部小片である。11は複合口縁壺の小片である。12は壺の胴部と頸部の境付近で、この部分に1条の三角凸帯が巡る。4号住居跡からは、ほかにフードコンテナー1箱分が出土している。9号住居跡からは小片・細片が約120点出土した。口縁部はみられなかったが、頸部の破片をみるとく字状に近い逆L字状を呈すると思われる。10号住居跡からは230点の小片・細片が出土した。13は逆L字状を呈す口縁部小片で、平坦面は短く、端部はやや上方に延びる。他の小片はく字状に近い形状を呈す口縁部と平坦な底部が各1点みられたほか、西新式の凸帯を貼付した頸部片も1点出土した。14～16は11号住居跡からの出土で、ほかに100点程度の弥生式土器の小片・細片が出土した。14～16はいずれも口縁部の小片で、14・15はく字状に近い逆L字状口縁部をもつが、16はく字状口縁といってもさしつかえない。16の口縁端部は磨滅がすすんでおり、もう少し角張ると考えられる。また、17・18も11号住居跡からの出土である。17は断面8×6mmの柱状の2本の鉄器が錆により癒着したものである。18は細粒砂岩製の砥石で、現存する全ての面を使用している。

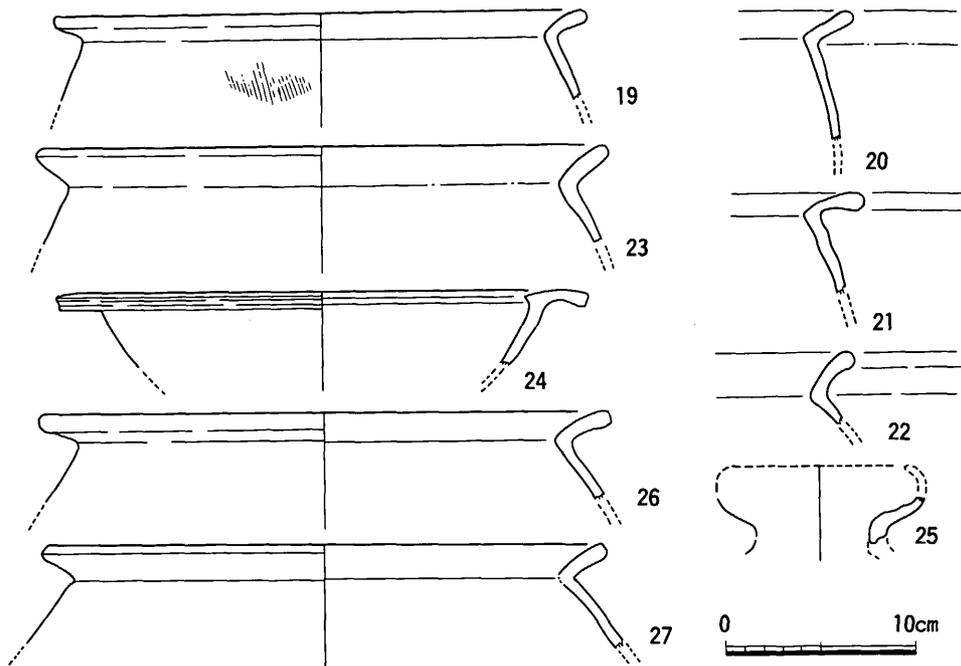


第26図 住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）

## 2. 竪穴状遺構（第27図）

19～22は1号竪穴状遺構から出土した。19は1/6程の甕の口縁部周辺の破片で、復元口径28cmを測る。く字状口縁を呈し、屈曲部内面には稜が巡る。最大径は胴部にもつと考えられる。20～22はいずれも小片で口径の1/10以下の残りである。20・22はく字状口縁を呈し、21は逆L字状口縁を呈す。いずれも内面屈曲部には稜が認められる。23～25は2号竪穴状遺構から出土した。23は口径30cmと推定される1/7程の甕の口縁部周辺の破片である。く字状口縁を呈し、屈曲部内面の稜はあまい。24は口径28cmと推定される1/6程の鋤先状口縁をもつ高坏部片である。口縁平坦面はやや湾曲し、内側の反りは小さい。25は袋状口縁をもつ短頸壺の小片である。26・27は3号竪穴状遺構から出土した。それぞれ口径30・29.6cmと推定される1/6程度の甕の口縁部周辺の破片である。く字状口縁を呈し、屈曲部内面には稜が巡る。最大径は胴部に

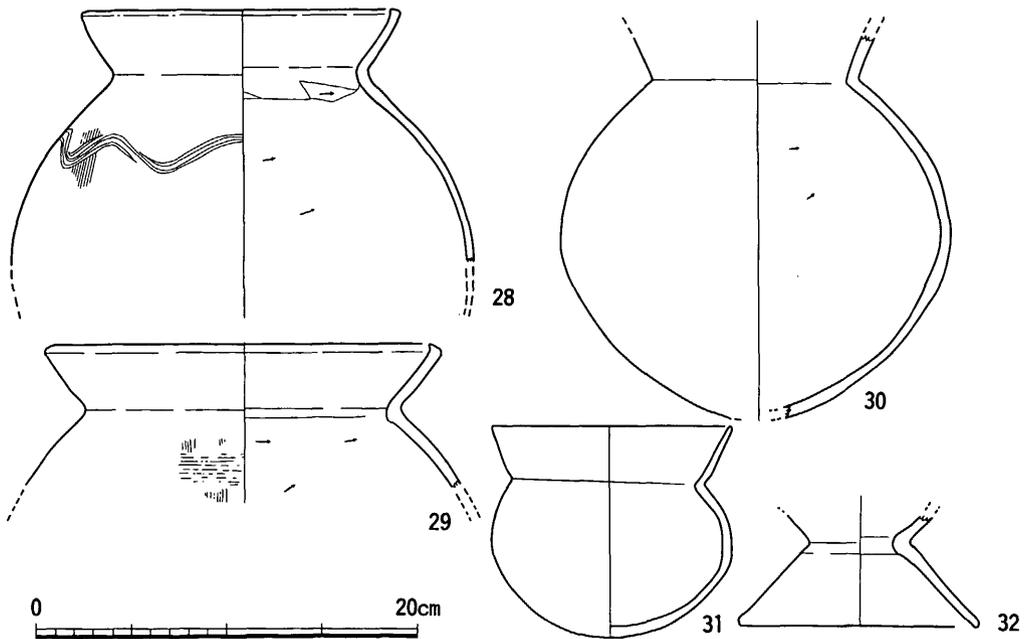
もつと考えられる。その他、1～3号竪穴状遺構から出土した破片の内、甕の底部はいずれも厚さ1cm未満の平底を呈すもののみであった。



第27図 竪穴状遺構出土遺物実測図（縮尺1/4）

### 3. 貯蔵穴（第26図 図版11）

貯蔵穴とした遺構からは全体に遺物の出土が極めて少ない。28～32は16号貯蔵穴からの出土である。28・29はいわゆる布留甕で、やや湾曲する口縁部を呈し、端部は上方に跳ね上げる。球形をした胴部は細かい縦方向の刷毛目が施され、肩部付近に28は櫛書きによる波状文、29は横方向の刷毛目が施される。内面は頸部直下から丁寧なケズリが施され、器壁は薄く仕上げられている。また、図示しなかったが、底部の破片はほぼ球状を呈し、内面には指頭痕が多数残っている。30は長頸壺で、口頸部および体部の1/2以上を欠失する。体部はほぼ球状を呈し、欠失する口頸部は外に直線的に開きながら立つと考えられる。器面はあれており調整は明瞭でないが、胴部内面にはケズリが認められる。器壁は比較的厚く、胎土も粗い。31は小型丸底壺で、口径12.5cm、器高11cmを測る。球形の体部に、体部高の37%程の高さの口頸部がつく。器面があれ、調整は明確ではないが、器壁は薄く仕上がり、丁寧な作りである。32は小型器台で、脚部の1/4と受部とのくびれ部が遺存する。脚裾径は12.6cmを測り、直線的にすぼまり、くびれ部下に僅かな稜をもつ。遺存する受部は直線的に外傾する。調整は明瞭でないが丁寧なナデで仕上げられ、くびれ部に刷毛目がわずかに認められる。器壁は比較的薄く仕上がる。

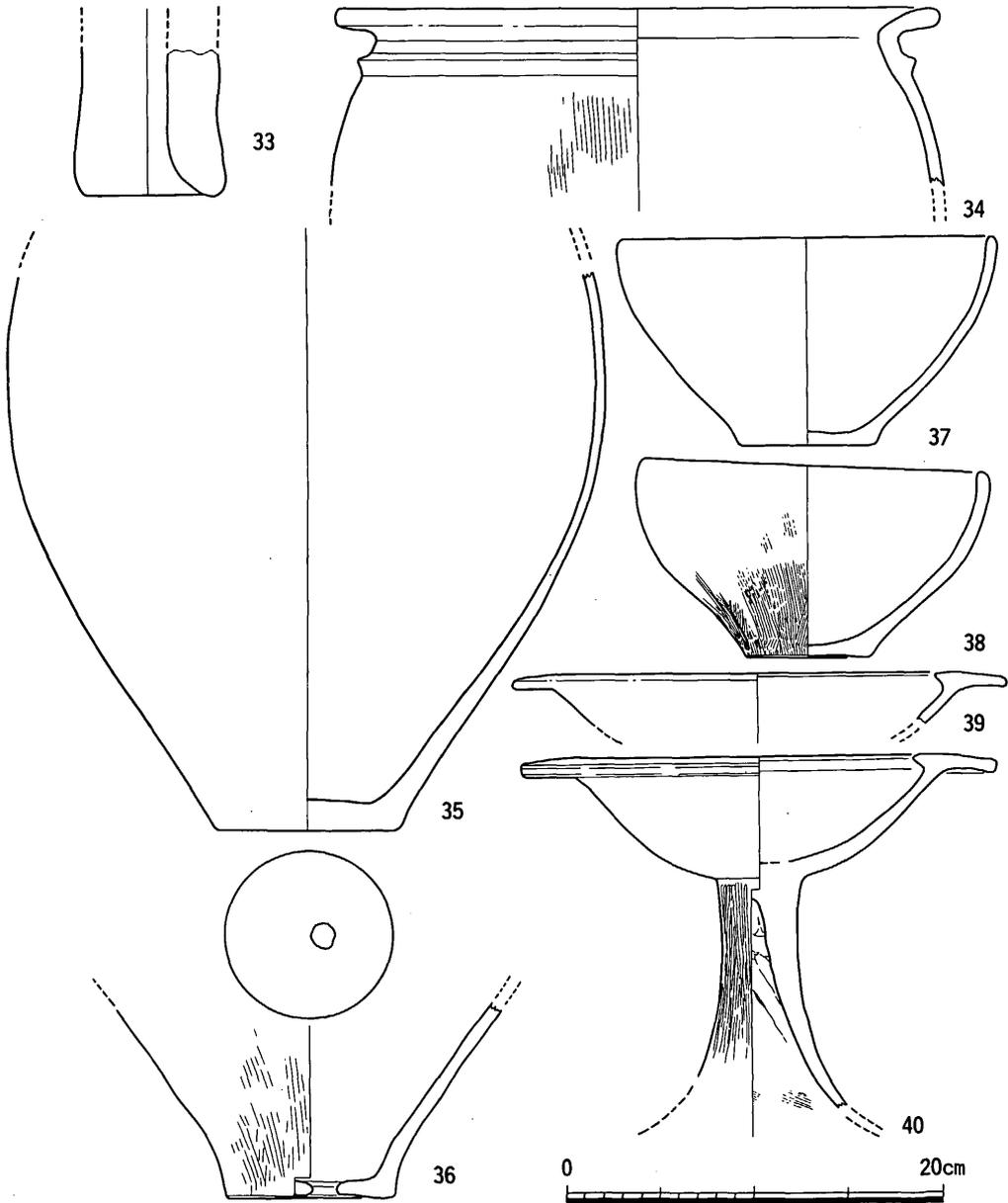


第28図 貯蔵穴出土遺物実測図（縮尺1/4）

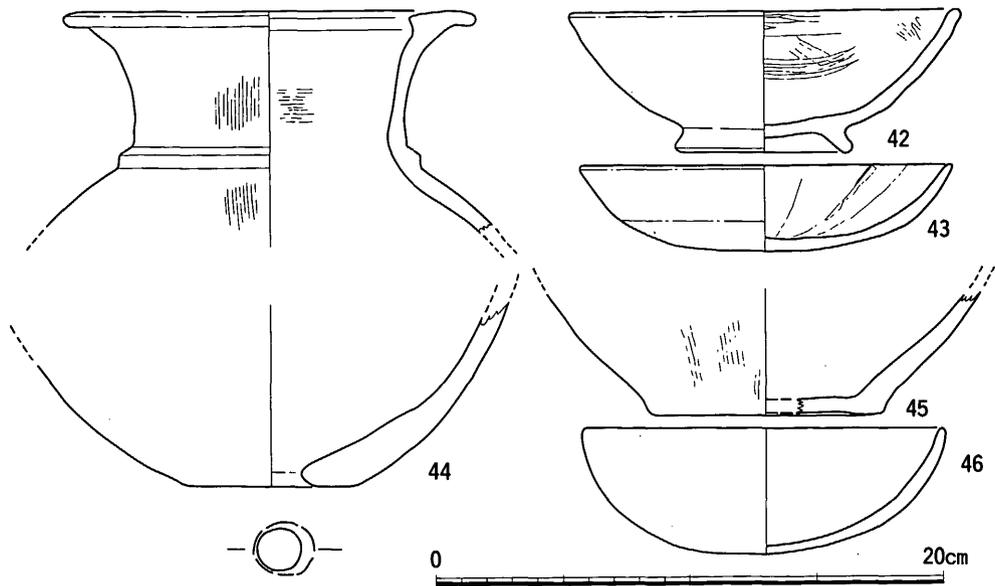
#### 4. 土壙（第29・30・31図 図版12）

33は4号土壙から出土した支脚である。上半部を欠失する。34～40は6号土壙から出土した。34は甕上部の1/6程の破片である。口径32cmと推定される。口縁部は逆L字状を呈すが、平坦面は端部にかけて丸みを帯びながら上がる。頸部直下には1条の断面三角形の凸帯が巡る。35は上部を欠失する甕で胴部中位が張る。36は甕の底部で、焼成後に外側から内側に向けて穿孔が行われる。37・38は鉢で、37は1/3程を欠失し、38はほぼ完形である。口径、器高、底径はそれぞれ37が20.1cm、11cm、7.2cm、38が17.6～18cm、9.9～10.6cm、6.4～6.6cmを測る。39は高坏の口縁部の小片で口径は26.2cmと推定される。口縁部は鋤先状を呈し、平坦面は水平に延びる。40は脚裾部と坏部の1/4程を欠失する。口径は25.3cmを測る。鋤先状を呈す口縁部はほぼ水平に延び、端部が僅かに下がる。脚部外面にはミガキが残る。外面と坏部内面には丹が塗布される。41は11号土壙から出土した壺の口頸部で全体に磨滅が著しい。鋤先状を呈す口縁部は、口径16.2cmを測る。頸部は外反して開き、胴部との境に断面三角形の凸帯を貼付する。42・43は12号土壙の床面にならべて置かれていた土師器である。42は黑色土器の椀で、内面のみ燻したA類で、口径15.5cm、器高5.5～5.7cm、高台径7cmを測る。器壁はやや厚目で、高台は外傾して貼付される。軟質のため調整は明瞭でないが、体部外面中位に指頭痕が一条巡る。また、内面にはミガキが残る。43は土師器の丸底坏で口径は14.7cm、器高3.4cmを測る。磨滅のため調整は不明瞭であるが、体部外面下位にはヘラ切り痕を残す。また内面にはコテ当て痕

がある。44・45・47は13号土壙から出土した。44は壺状の外形をした底部で、底径6.4cmを測る。底部の中心から僅かにそれたところに穿孔が施される。穿孔は焼成後に外側から内側にむかい、内面が剝離しないよう丁寧に施される。底部は内側から粘土を加え器壁を厚く仕上げ、胎土はやや粗いものを用いている。外面は火を受け赤変しているが、この土器は当所から加熱されることを前提に作られたと考えられる。45は壺の底部で、1/2余りを欠失する。底径9.3cm



第29図 土壙出土遺物実測図 (縮尺1/4)

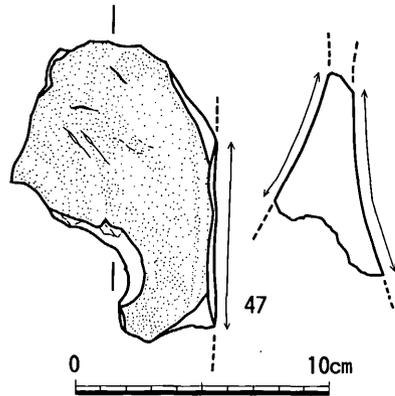


第30図 土壙出土遺物実測図 (縮尺1/3)

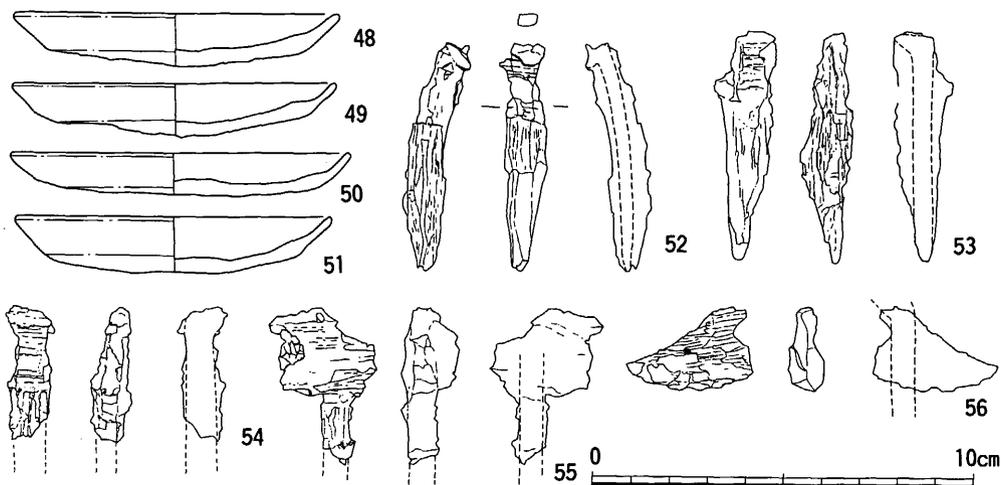
を測る。47は細粒砂岩製の砥石残片で、残存する面はすべて使用される。46は16号土壙出土の土師器坏で口径14.1cmを測る。調整は磨滅が著しく明瞭でない。

### 5. 木棺墓 (第32図 図版12・14)

48~56はいずれも1号木棺墓から出土した。48~51は土師器aで48(上)と49(下)は重なって、50は単独で床面近くに置かれていた。口径は8.2~9cm、器高1.1~1.4cm、底径6.4~6.6cmを測る。いずれも底部はヘラ切りされ、48と49には板状圧痕が残る。52~56は鉄製の釘で、52・53は長さ5.9cmを測る。いずれも比較的良好に木質が遺存する。



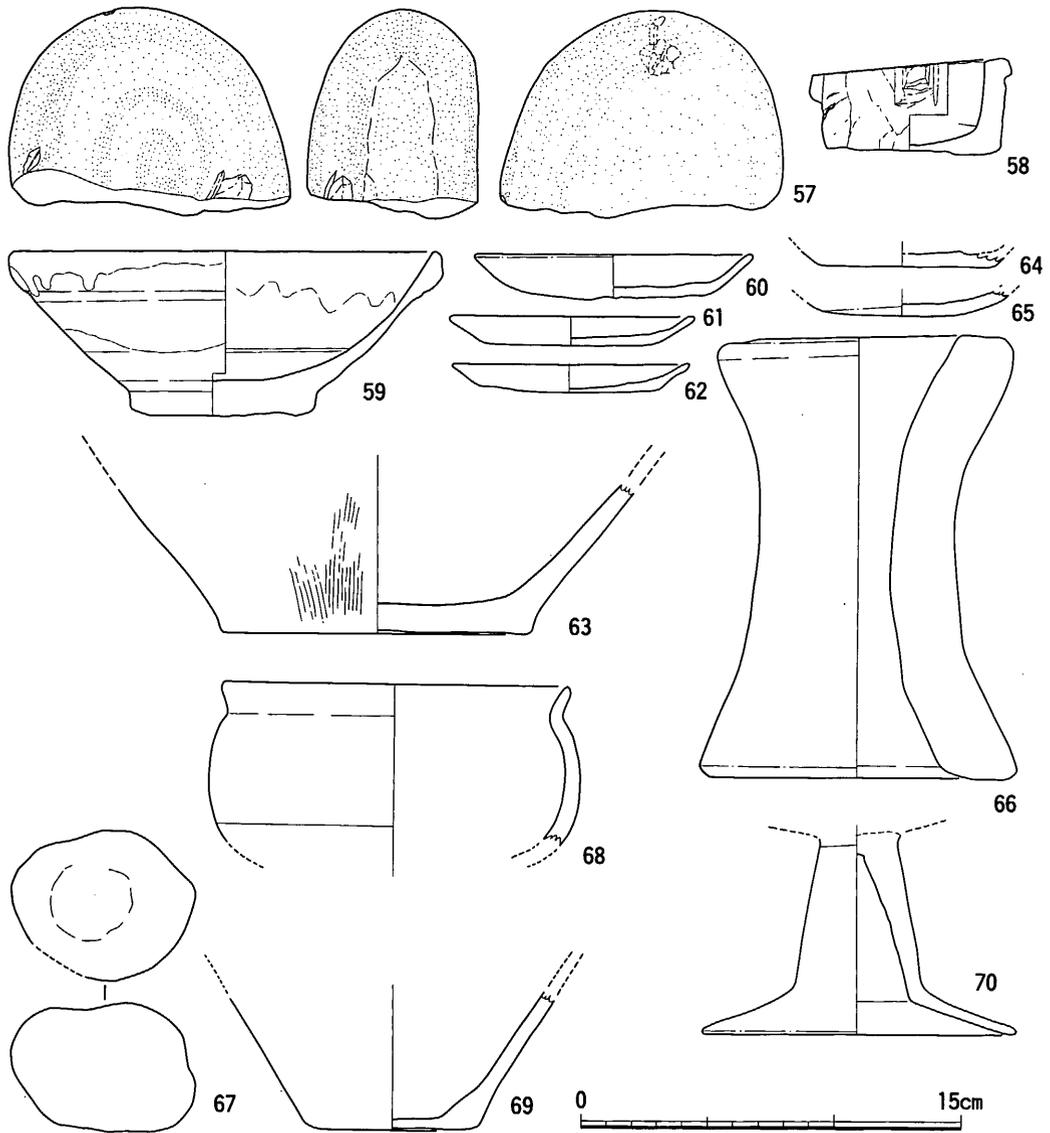
第31図 土壙出土遺物実測図 (縮尺1/3)



第32図 木棺墓出土遺物実測図 (縮尺1/2)

## 6. ピット (第33図 図版12・13)

57は30001号ピットから出土した半欠する砂岩製の磨石である。端部に叩痕を残す。58~62は30002号ピットから出土した。58・59・62は床面から15cm余り浮いた位置でセットで検出した。58は滑石製の小型の石鍋である。ミニチュアのようなものであるが、火にかけて使用しており、底面は煤が付着し、器面は剝落する。口径は7cmを測り、その4方に取手をもつ。器高は3.7cm、底径6.5cmを測り、胴部が僅かに張る。59は口縁部を玉縁にするIV類の白磁である。淡青灰色の胎土に、やや青味の強い釉が、体部下半を除き施釉される。底部は厚く、高台の削り出しが浅い。内面見込みには沈線状の段をもつ。60~62は土師器の皿aで、それぞれに口径11cm、9.6cm、9.2cm、器高1.3cm、1.2cm、1.1cm、底径7.1cm、6.8cm、7cmを測る。いずれもヘラ切りで、板状圧痕が残る。63は30010号ピットから出土した甕の底部で、1/2程が遺存する。底径は12.4cmを測る。64・65は30038号ピットから出土した土師器で、底径はそれぞれ6.9cm、7.2cmを測る。いずれもヘラ切りである。66は30057号ピットから出土した支脚である。受部径17.1cm、器高11.5cm、脚裾径12.2cmを測る。外形は器台状を呈すが、器壁は厚く、中央部で2.5cmを測る。67は30081号ピットからの出土した粘土を団子状の塊にして焼成したもので、重量は175gを量る。68・69は30089号ピットから出土した。68は土師器の小型丸底壺で底部を除き約1/4が遺存する。口径は13.6cmと推定され、口縁部は短く、直線的に外傾する。胴部下位以下はヘラ削りされる。69は甕の底部で、底径6.8cmを測る。70は30098号ピットから出土した高坏の脚部で筒部はややすぼまりながら立ち上がる円筒形を呈し、裾部は屈曲し外側に大きく開く。脚裾径12.4cmを測る。

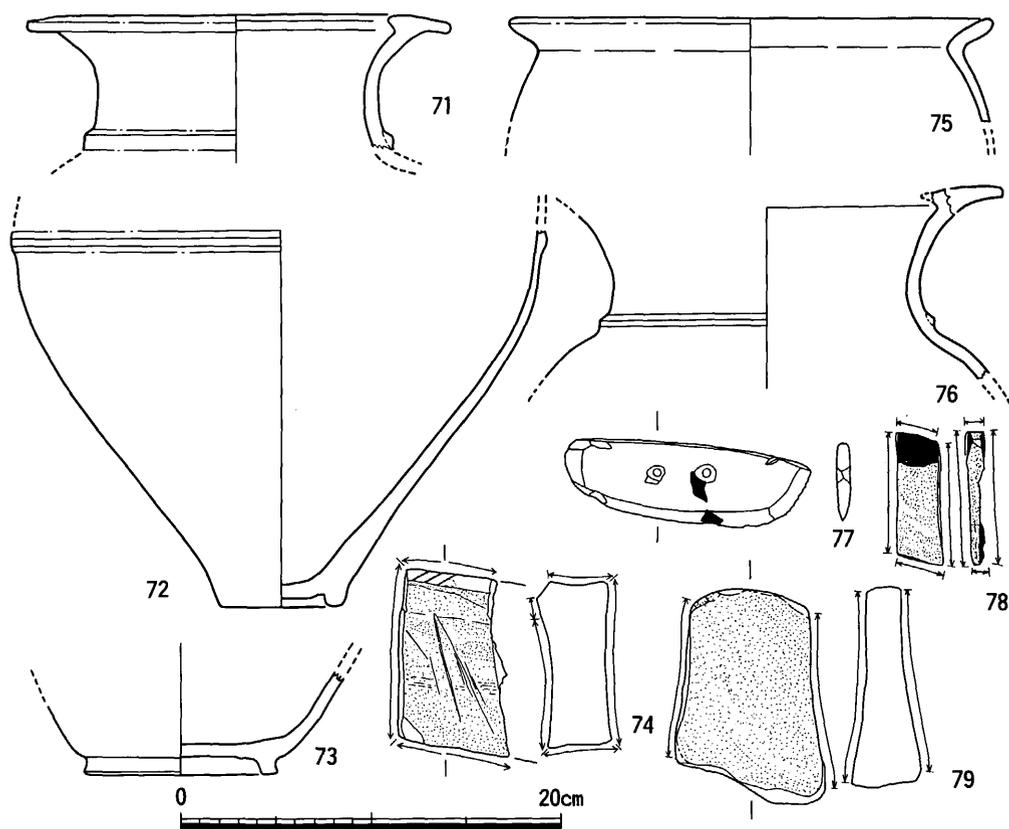


第33図 ピット出土遺物実測図 (縮尺1/3)

7. 段状遺構 (第34図 図版13)

71~79は2号段状遺構から出土したものである。71は壺の口頸部で、口頸部の4/5程が遺存する。鋤先状を呈する口縁部は口径22.4cmを測り、頸部と胴部の境には断面三角形の凸帯を一条巡らす。72は壺の胴~底部で胴部中位に断面コ字状の凸帯を貼付する。底径6.1cmを測る底部は中央部の粘土が剝離する。73は須恵器の長頸壺の底部で径10.2cmを測る断面コ字状の低い高台が貼付される。74は細粒砂岩製の砥石で、遺存するほぼすべての面を使用する。75~79は

2号段状遺構の先端からの出土である。75はく字状口縁を呈す甕で、口縁部の1/5程が遺存しており、口径は25.4cmと推定される。76は1/2程が残る壺の口頸部で、口縁端部を欠失する。頸部と胴部の境には断面三角形の凸帯を巡らす。77は砂質凝灰岩製の石包丁で両刃の半月形外弯刃である。全長12.7cm、最大幅4.1cm、最大厚7mmを測る。孔は径4mmで両方から穿つ。78は砂質凝灰岩製の小型の砥石で、キメが細かい。79は細粒砂岩製の砥石で、上下と左右側面を使用している。



第34図 段状遺構出土遺物実測図 (縮尺1/4)

## V ま と め

今回の調査と昭和60年度の発掘調査で、脇田遺跡B地点の北端の様相が明らかになった。

3号・4号・7号・9号・11号住居跡は円形プランを呈す大型の竪穴式住居跡で北側に伸びる尾根から、その西側の谷に沿って回り込むように配される。尾根と頂部平坦面の境は東西から地山整形される。その東側の地山整形面に12号住居跡を検出したが、この住居跡も円形プランを呈す大型の住居跡と推定される。頂上平坦面の西側斜面には貯蔵穴が集中して配される。竪穴状遺構としたものは大型の貯蔵穴か小型の住居跡か判断しえなかったものである。状況から住居跡の可能性が大きいと考えるが推測の域を出ない。1号は、貯蔵穴が集まる斜面の対面する斜面の頂部近くにあり、2号・3号は13号住居跡のさらに下に上下に並んで検出した。

以上の住居跡や貯蔵穴、竪穴状遺構は時期を確定できる資料の出土をみななかったが、埋土からの遺物は弥生時代後期初頭を中心とする時期のものが大半で、また調査中に出土した弥生時代の遺物も多くがこの時期で、この時期以前のものほとんどみられない。このことから、ほぼ弥生時代後期初頭を中心に営まれた集落であるとも推測される。しかし、脇田遺跡が所在する地域一帯において大型の円形住居跡が営まれるのはもう少し上の時期であり、時期の確定にはさらに検討が必要である。集落規模においては、4号住居跡と11号住居跡が隣接していることなどから、これらの住居跡が同時に存在したとは考えられない。なお、15号貯蔵穴の出土遺物は切り合いによる混入と考えられる。この混入土器は布留形甕を中心とする一括遺物である。

木棺墓は1号木棺墓から供献土器が出土している。出土した4点の皿aの底部はいずれもヘラ切りであるが、口径は8.2～9cmと小さい。このことから底部をヘラ切りするもののうち最も新しい時期に位置付けられると考えられる。山本信夫氏の編年観<sup>註1</sup>によると口径は小さいがXII～XIII期、12世紀前半代に位置付けられよう。以下の中世土器についても山本信夫氏の編年観による。

12号土壌から出土した黒色土器は体部の丸味が強く、高台は低い。土師器は丸底坏aで、いずれもXII～XIII期に位置付けられ、また、30002号ピットで白磁や石鍋とセットで出土した土師器62も底部と口径からXIIまたはXIII期と考えられる。以上のことから、12世紀前半に脇田遺跡B地点は墓地や何らかの祭祀のために利用されていたと考えられる。また、4号・5号・6号溝状遺構は時期が明確でないが、主軸は南―北、または東―西からの振れがほとんどなく、何らかの規制が働いていたことも考えられる。

最後に、天拝山北裾部の遺跡の状況を概括してみたい<sup>註2</sup>。山稜裾部は開析されいくつかの小山をなす。脇田遺跡B地区もこの位置に属す。また、北の小山には和久堂城跡がある。さらに、これらの小山から低台地が伸び、これまでの発掘調査や表探のデータからはほぼ全体に遺跡があるような感さえ受ける。低台地からは数mの比高をもつ部分や緩やかに下る等して沖積部へ至る。

弥生時代の遺跡としては、剣塚遺跡から弥生時代前期の住居跡3軒(方形プランを呈すもの2軒、円形プランを呈すもの1軒)、後期中葉の住居跡が1軒、後期後葉の住居跡3軒、前期中葉～中期初頭の貯蔵穴群、および、貯蔵穴とほぼ時期を同じくする木棺墓・甕棺墓群が検出されている。桶田山遺跡では後期後葉から後期末の甕棺墓5基と、終末と推定される石棺墓14基が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、剣塚遺跡で6世紀末の住居跡1軒、脇田遺跡A地区では4世紀後葉から5世紀前葉の方形プランを呈す住居跡が7軒検出されている。また古墳等では剣塚1号墳が6世紀中葉頃の全長42mと考えられる前方後円墳、剣塚2号墳は墳丘の一部が確認されたにとどまるが、剣塚3号墳は6世紀後半代の円墳と考えられている。また、4世紀中葉から後半にかけて造営されたと考えられる、いわゆる低墳丘の方墳の古剣塚1～3号墳がある。唐人塚遺跡では5世紀、8世紀の遺物も見られるものの、概ね、6世紀から7世紀にかけて築造された横穴式石室を内部主体とする6基の古墳が確認された。また、いわゆる古式土師器の時期と推定される土壙墓15基、石蓋土壙墓6基、木棺墓3基、箱式石棺墓6基が検出された。脇田遺跡A地点では6世紀末ごろと考えられる横穴式石室を内部主体とする円墳1基が検出された。そのほかに横穴式石室を内部主体とする円墳である埴安神社古墳が埴安神社境内に開口しているほか、剣塚遺跡と唐人塚遺跡の間にある前田遺跡や、前田遺跡の東隣の大宰府条坊跡112次発掘調査からこの部分にも古墳が存在した可能性がある。

以上の遺跡の流れを整理してみると、弥生時代前期後半代から中期初頭にかけて剣塚遺跡を中心に集落や墓地が所在する。弥生時代中期前葉から中葉の遺跡は明らかではないが、弥生時代後半になると脇田遺跡B地区に集落が営まれるようになる。これ以降の弥生時代の集落も明らかではないが、杉塚廃寺の中心部の一部と考えられる個人宅地内から弥生時代の後期中葉の土器が出土しており、この一帯に集落が営まれていた可能性もある。また、剣塚遺跡以外の墓地も明らかではなく、最も近い墓地は南東500mにある桶田山遺跡が、時期的に脇田遺跡に近似する。しかし、距離や地勢から直接的に伴うものとは考えにくい。

古墳時代に入ると、脇田遺跡A地区で4世紀後葉から5世紀前葉の集落を検出している。また、この時期の墓地として古剣塚古墳群や唐人塚遺跡があり、その性格から集落はより広がるものと考えられる。この時期以降の集落は、現在のところ集落としてまとまって検出されていないが、その立地として、杉塚廃寺の基壇下から6世紀前半代の須恵器・土師器5点が一括で出土したことは興味深い。墓地は古墳時代前期の立地を踏襲している。

#### 註

註1 「大宰府における古代末から中世の土器」—10～12世紀の資料(1)

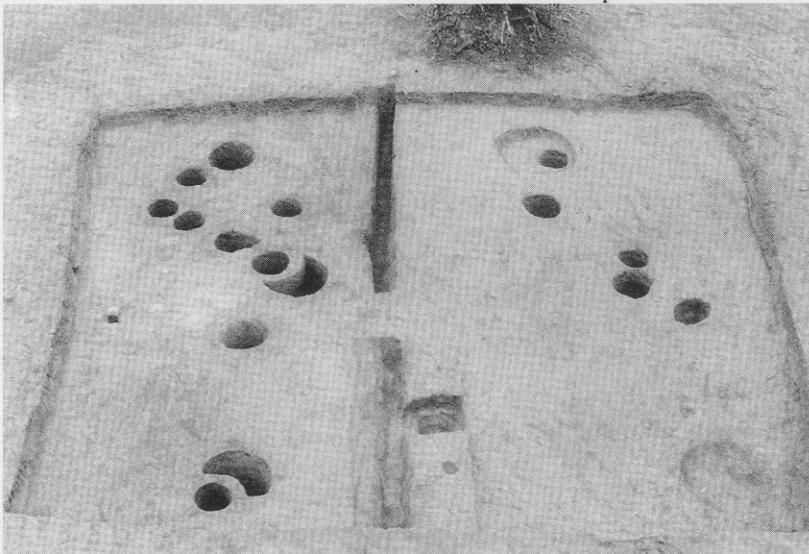
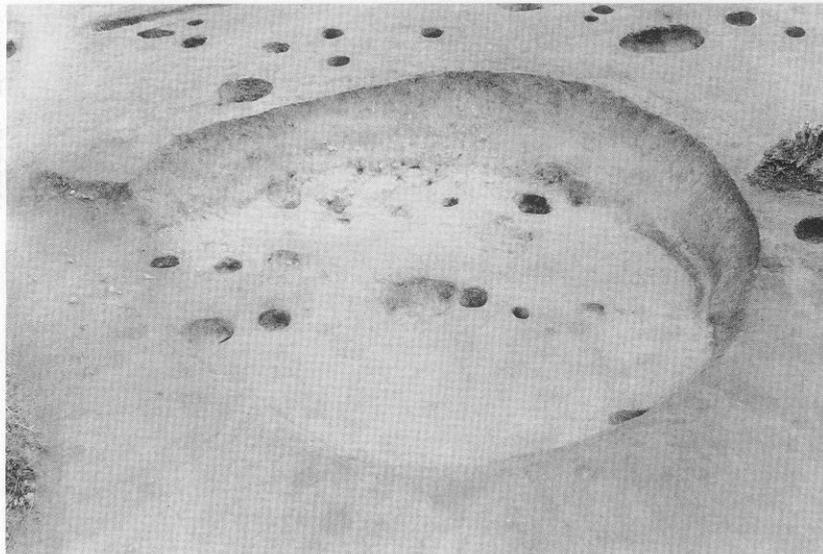
本文編一 山本信夫 1988 「中近世土器の基礎研究Ⅳ」日本中世土器研究会

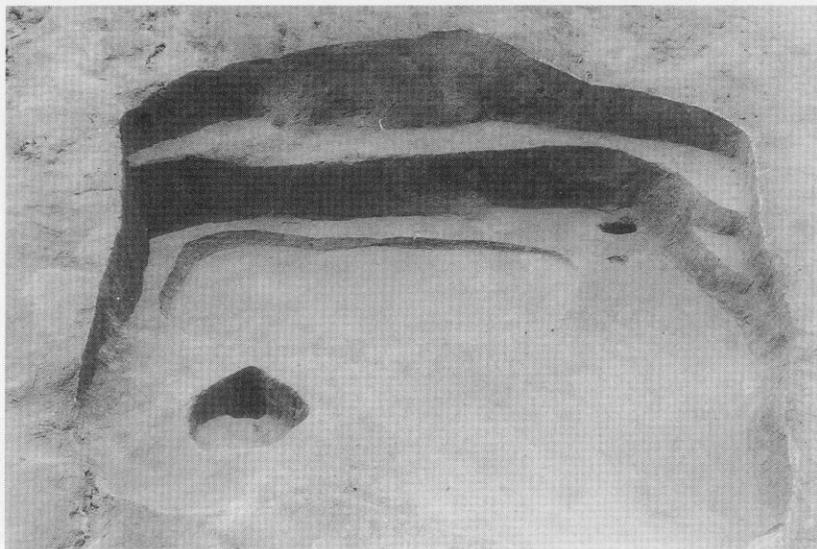
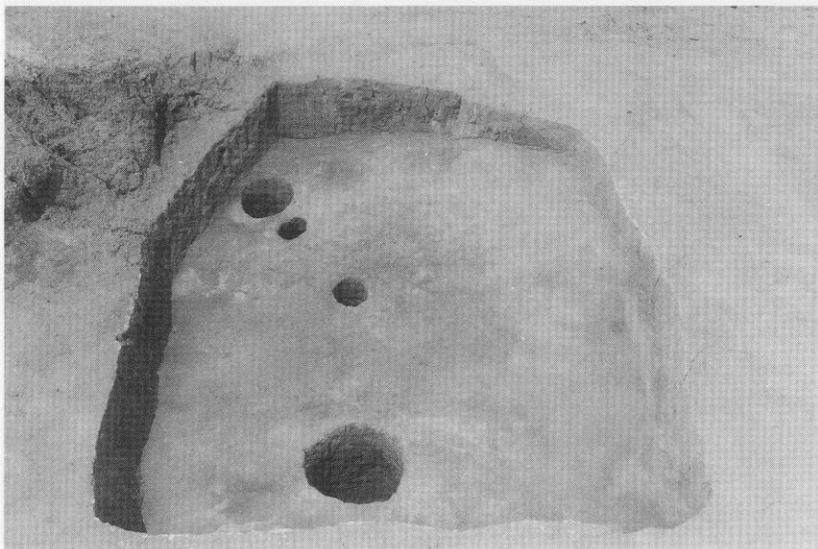
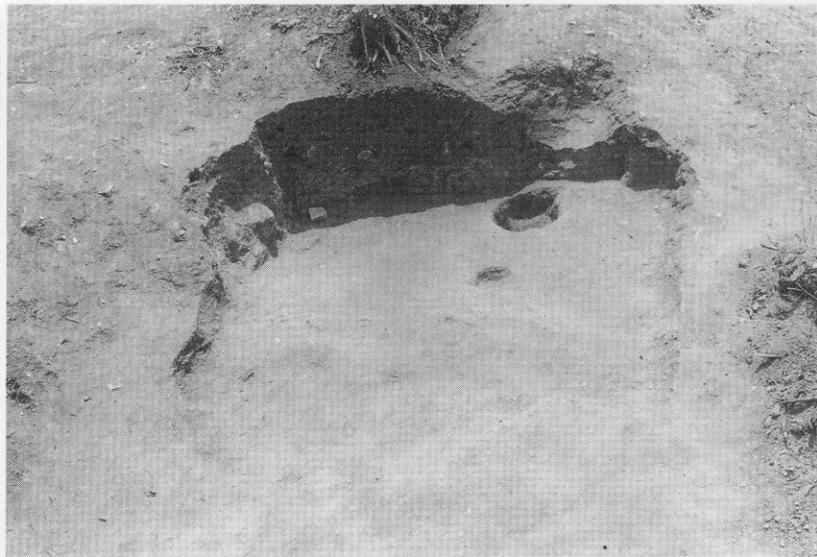
註2 遺跡の文献は「Ⅱ 位置と環境」を参照

# 図 版

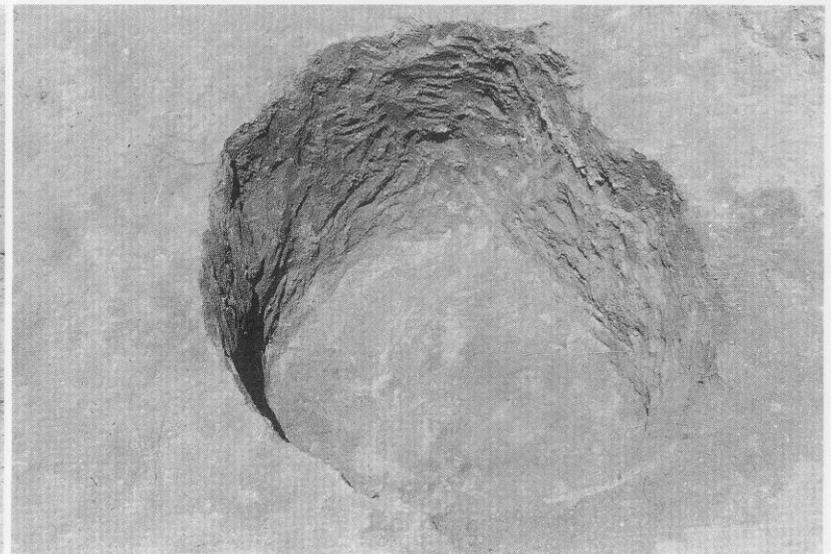
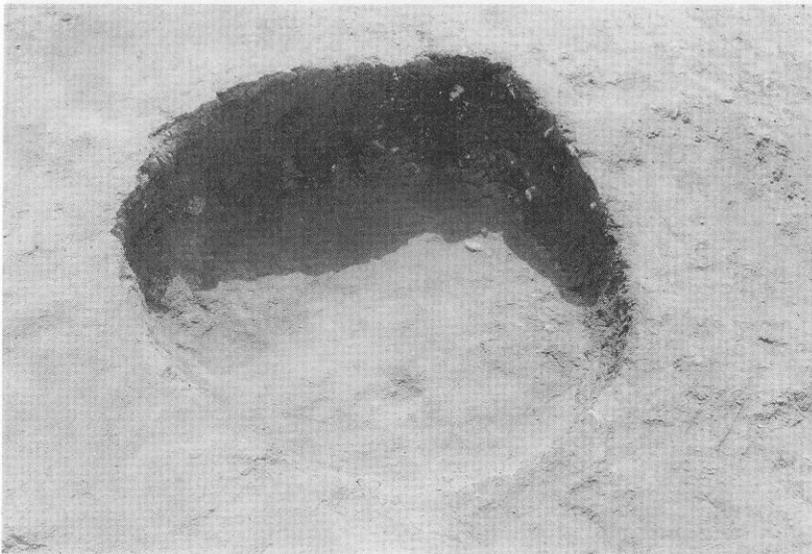


脇田遺跡B地区全景





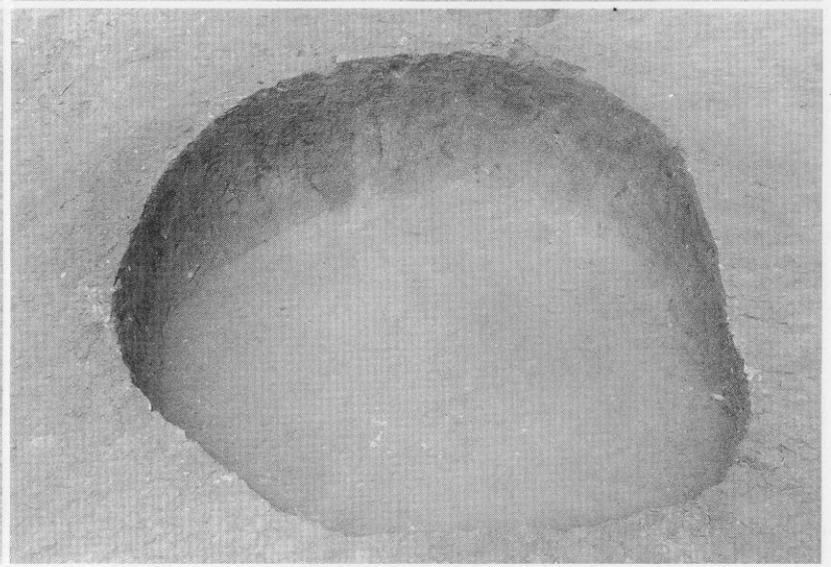
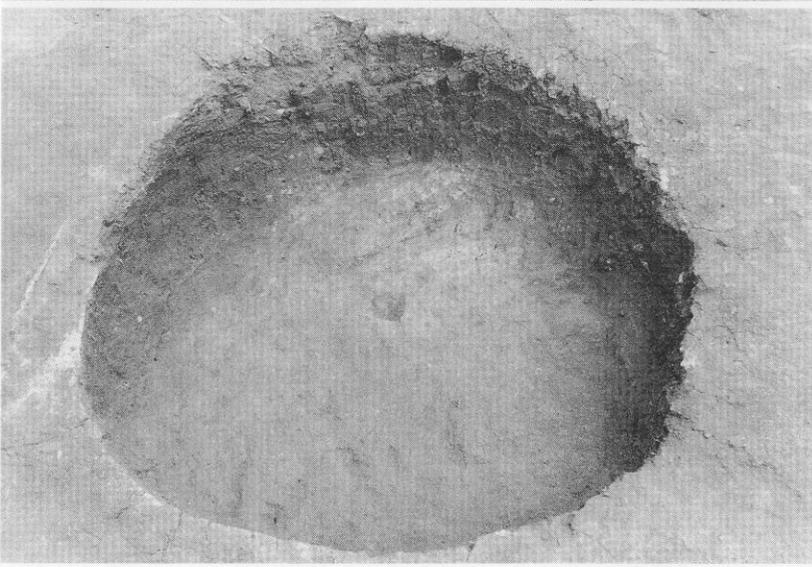
3  
号  
贮  
藏  
穴



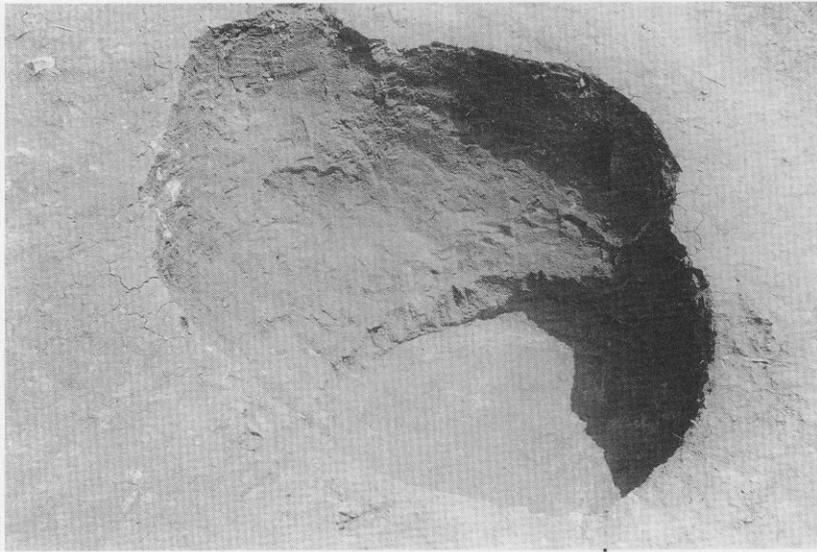
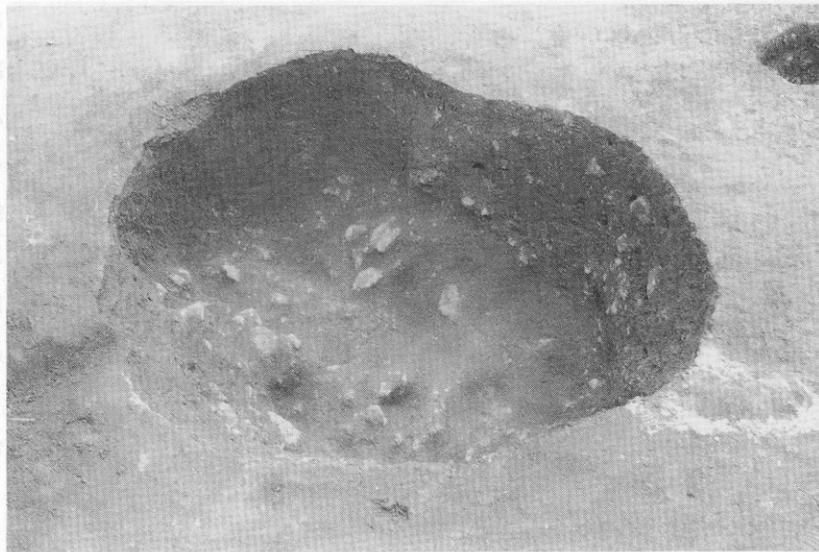
2  
号  
贮  
藏  
穴

3  
号  
贮  
藏  
穴

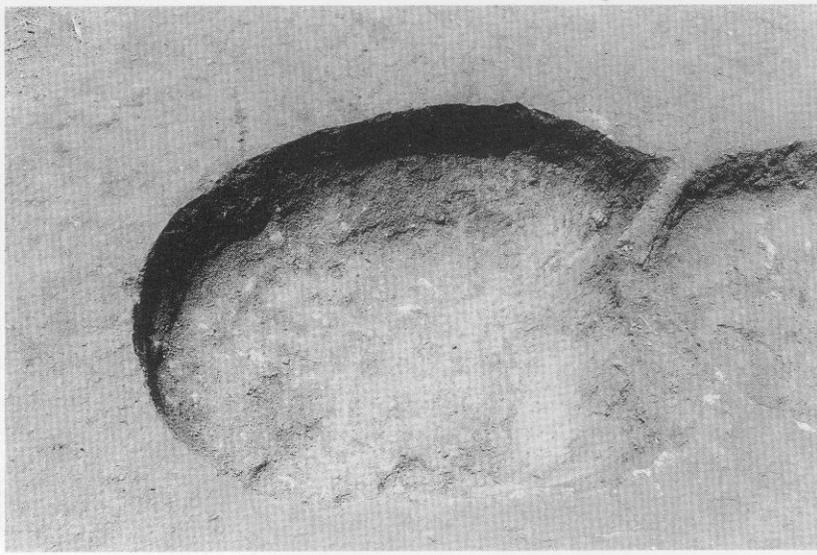
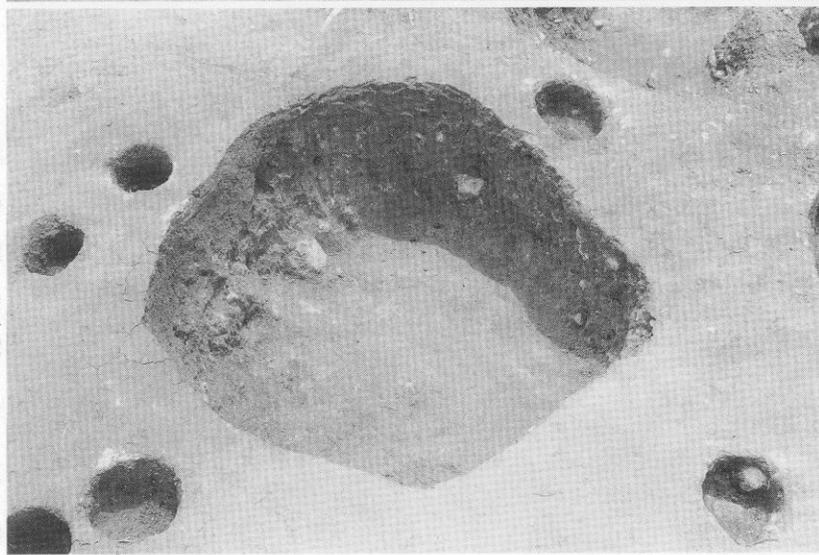
5  
号  
贮  
藏  
穴



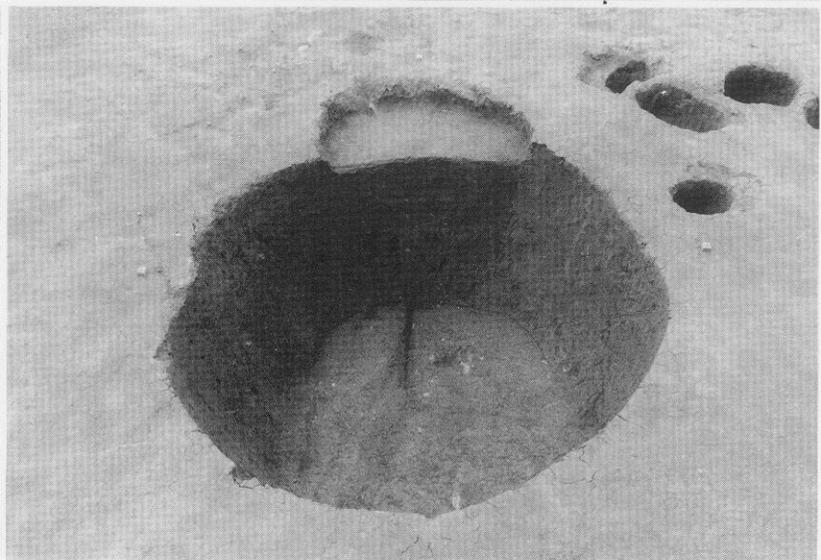
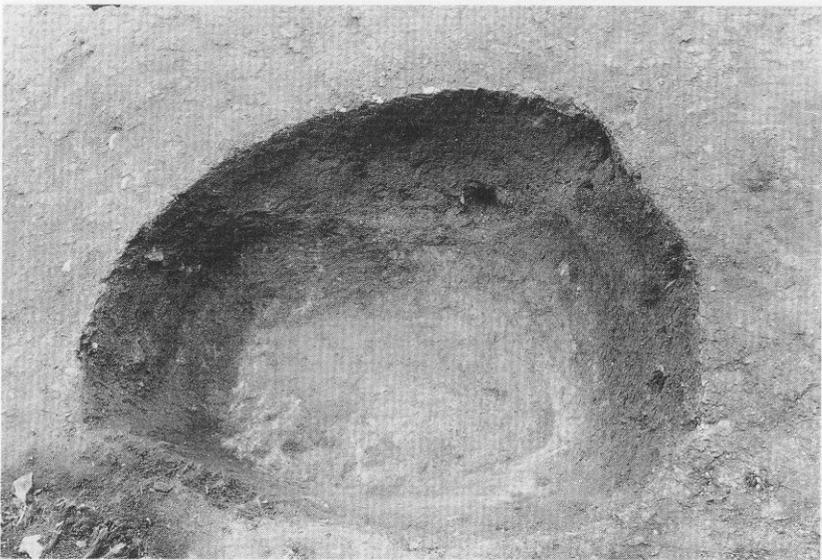
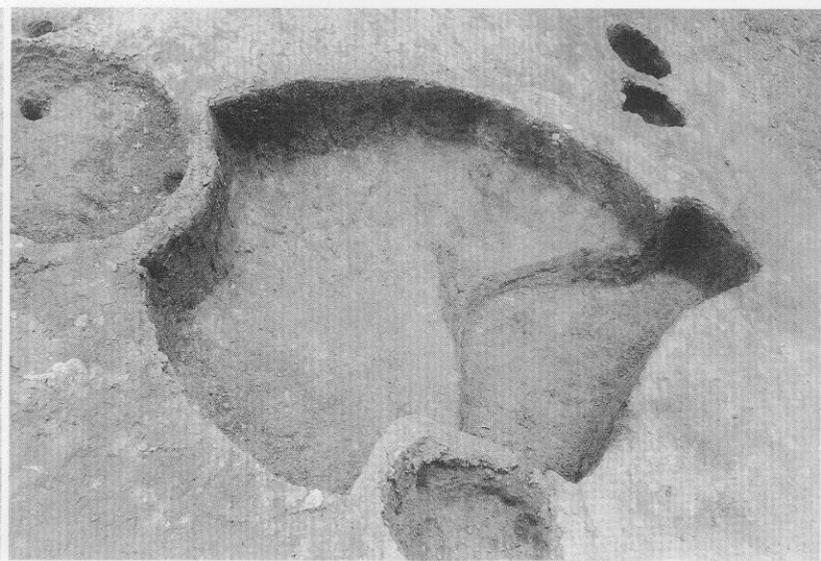
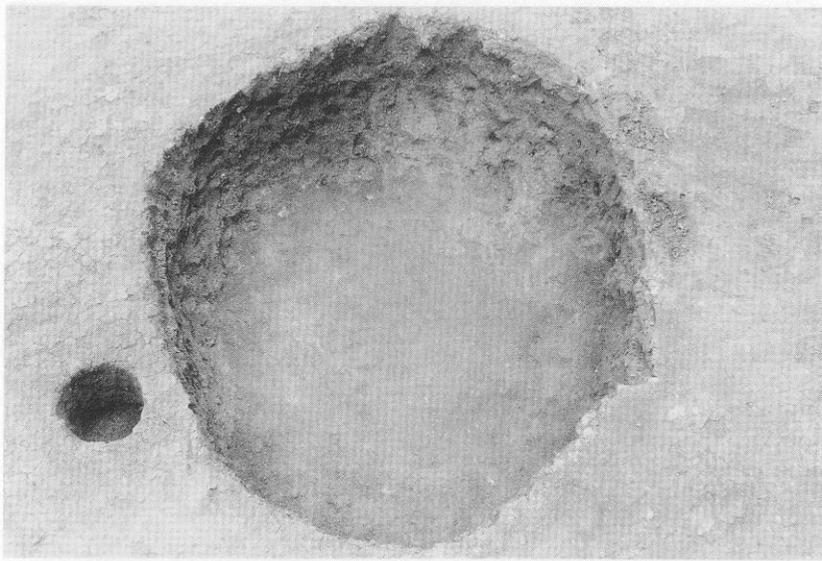
9  
7  
号  
号  
貯  
貯  
藏  
藏  
穴  
穴



9  
10  
号  
号  
貯  
貯  
藏  
藏  
穴  
穴

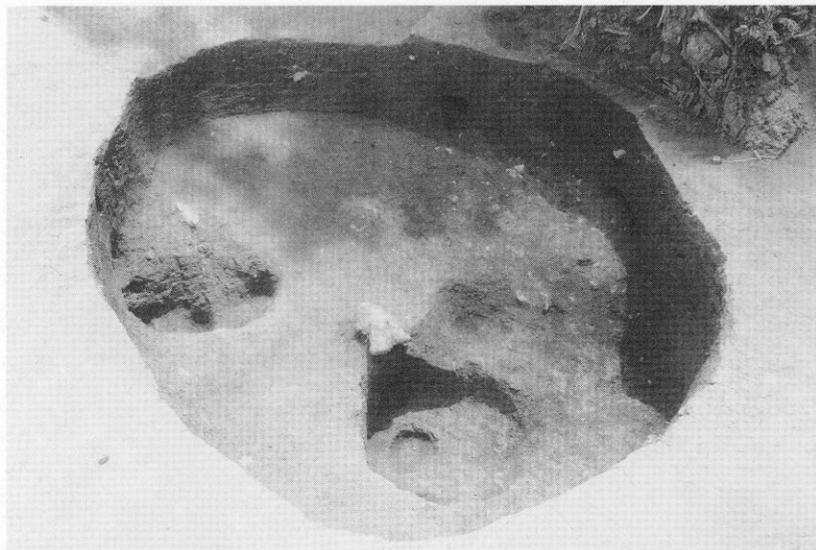


12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100

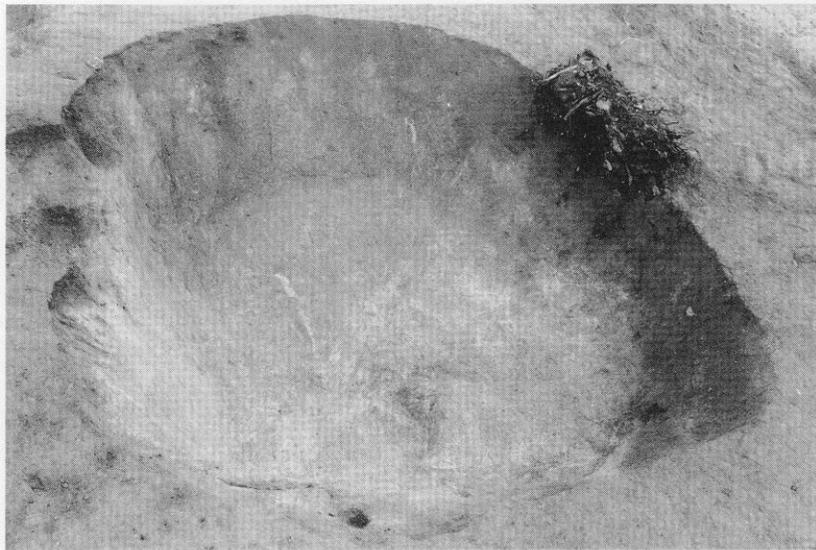


12  
号  
貯  
藏  
穴  
14  
号  
貯  
藏  
穴  
13  
号  
貯  
藏  
穴  
15  
号  
貯  
藏  
穴

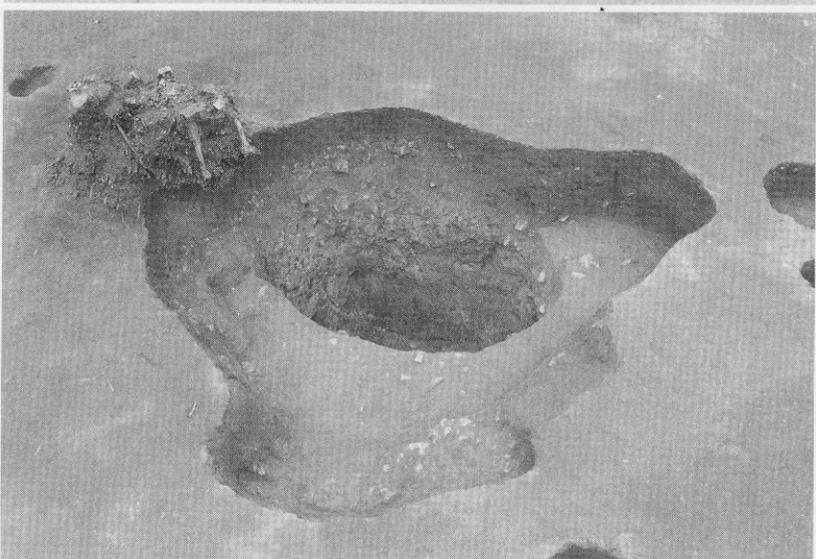
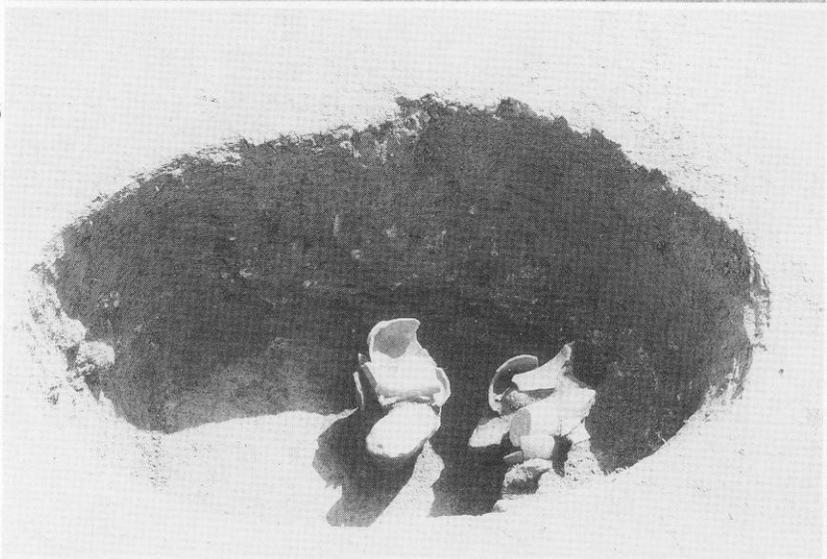
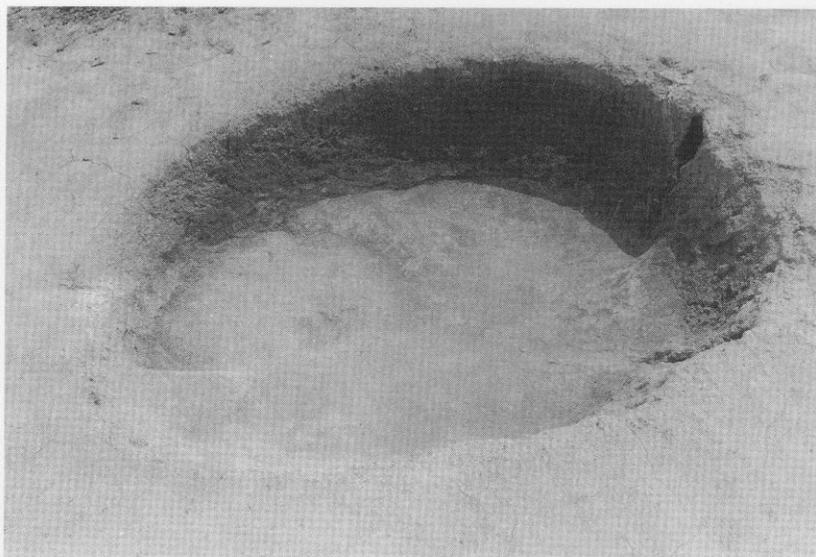
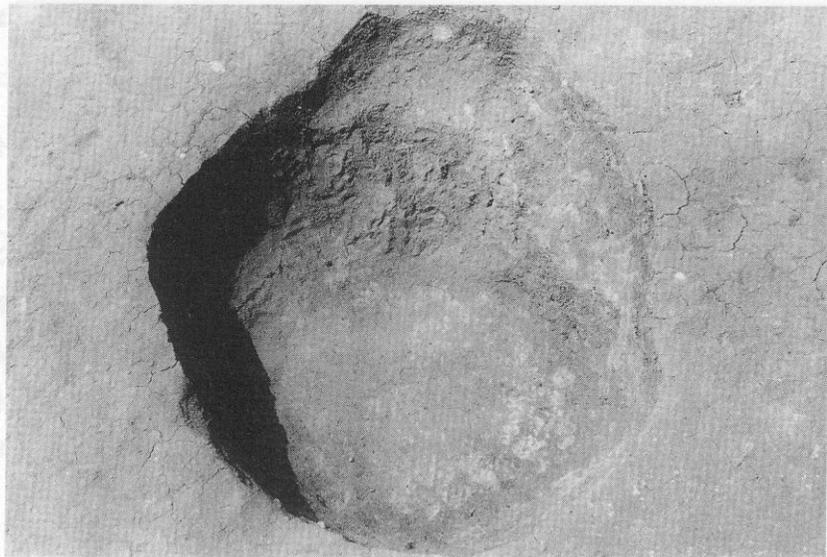
16  
18  
号  
号  
貯  
貯  
藏  
藏  
穴  
穴



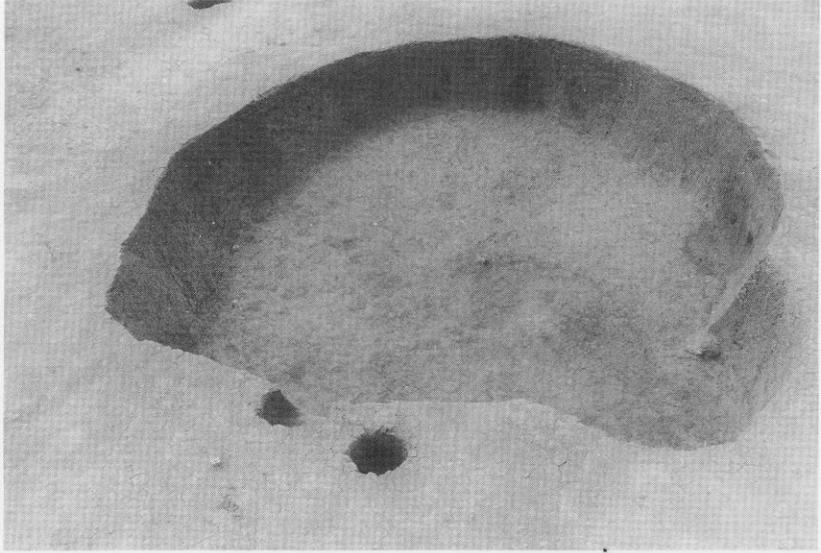
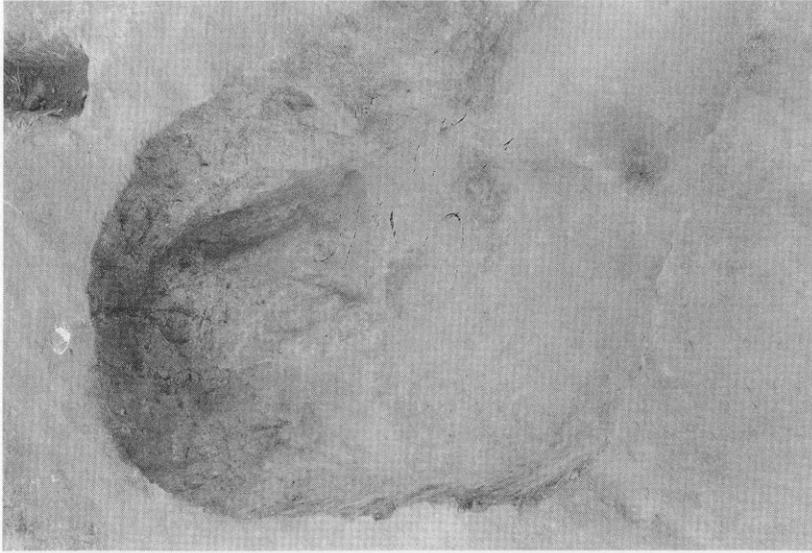
16 | 18  
号 | 号  
貯 | 貯  
藏 | 藏  
穴 | 穴  
19 | 4  
号 | 号  
貯 | 土  
藏 | 壙  
穴 | 壙



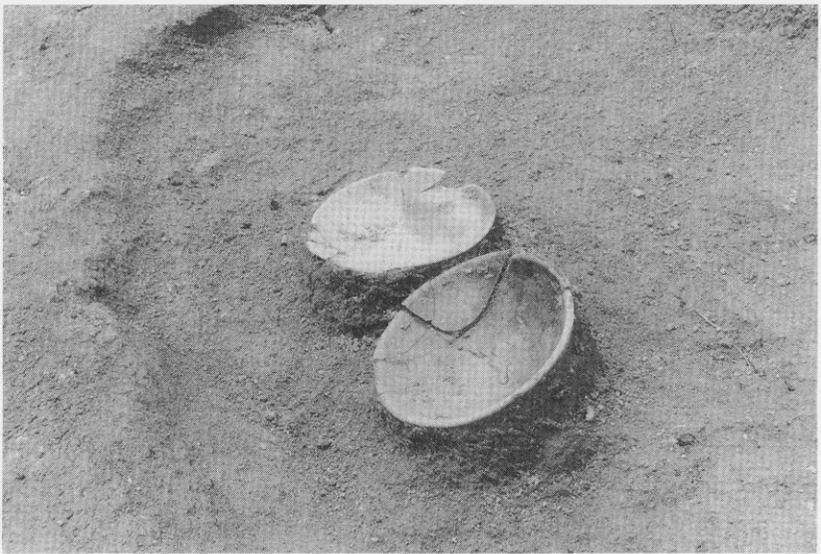
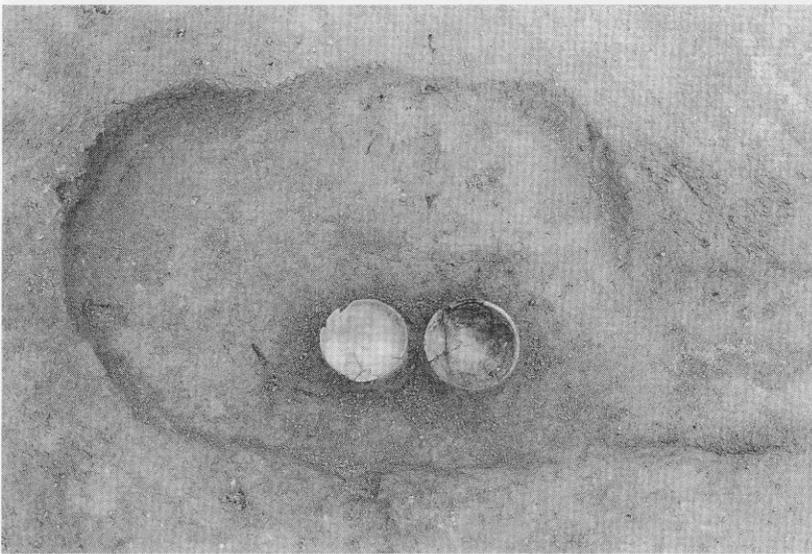
4  
15  
号  
号  
土  
土  
壙  
壙  
6  
8  
号  
号  
土  
土  
壙  
壙



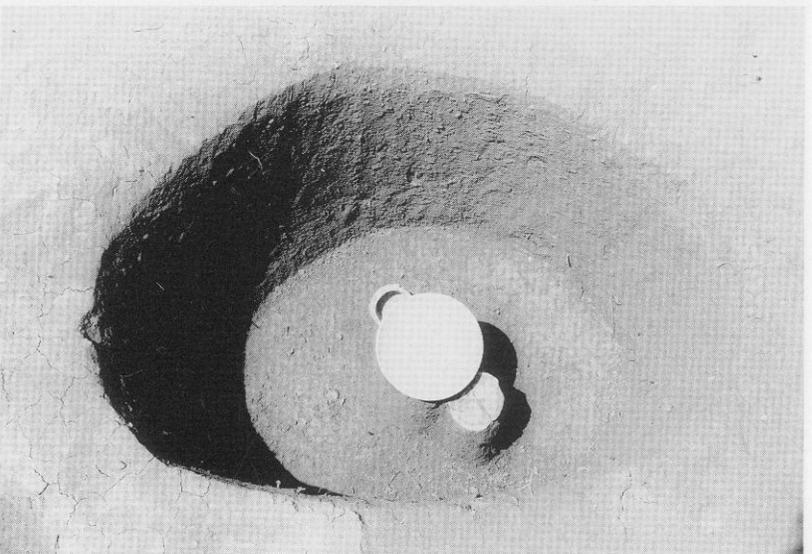
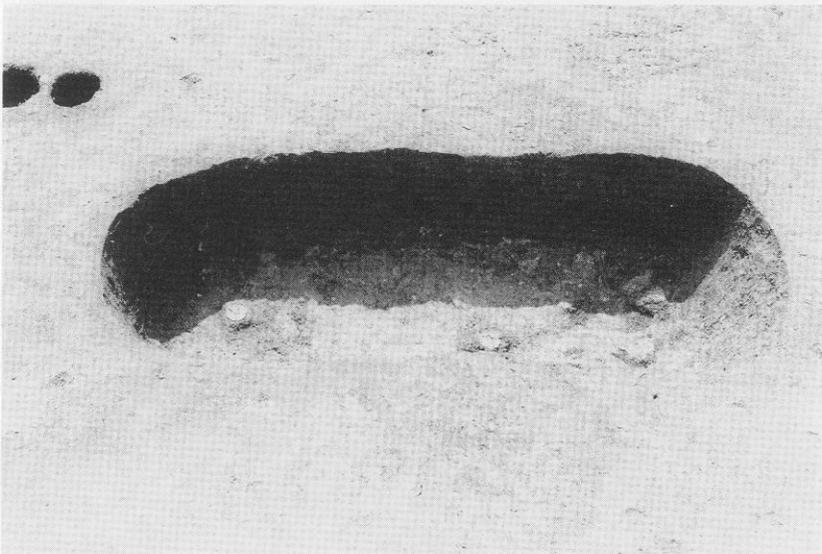
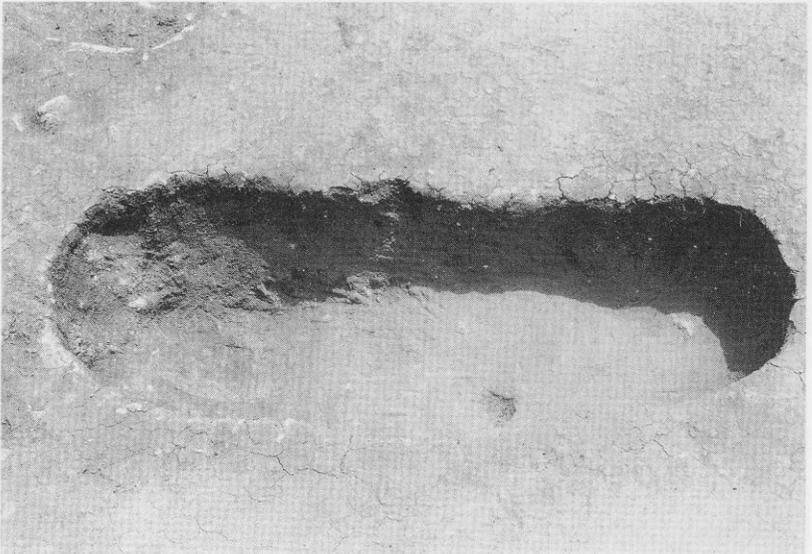
1011  
号  
土  
壙



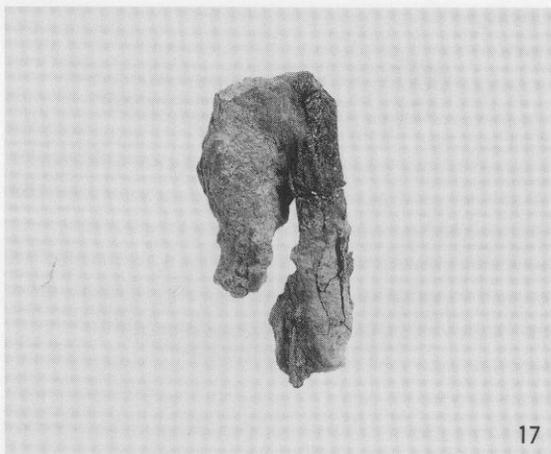
1011  
号  
土  
壙  
12  
号  
土  
壙



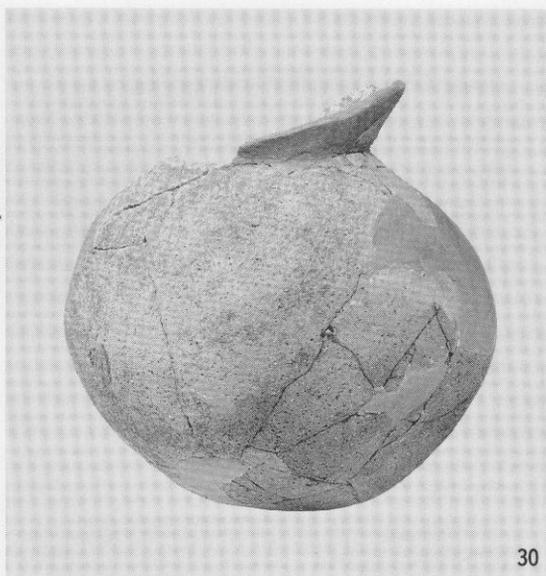
14  
13  
12  
11  
10  
9  
8  
7  
6  
5  
4  
3  
2  
1



14 | 2  
号 | 号  
土 | 木  
墳 | 棺  
1 | 墓  
号 | 3  
木 | 0  
棺 | 0  
墓 | 2  
 | 号  
 | ビ  
 | ッ  
 | ト



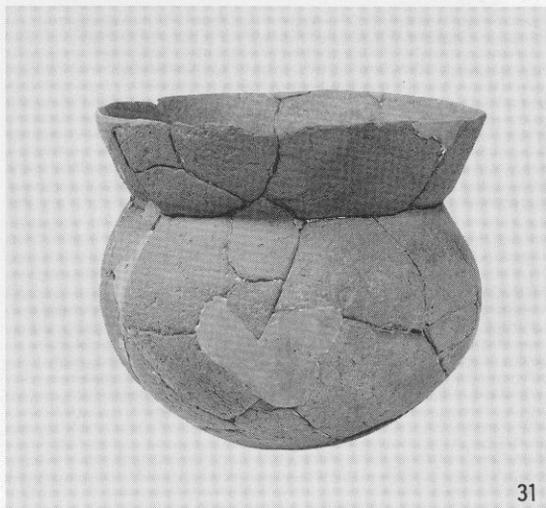
17



30



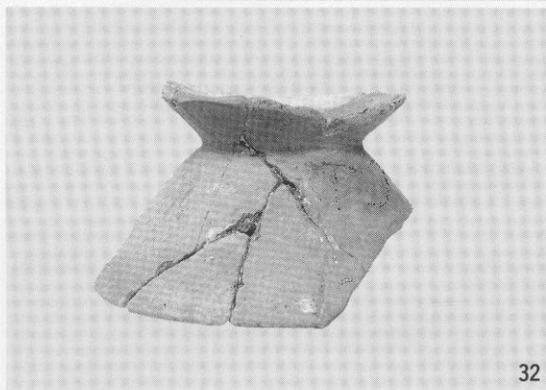
28



31

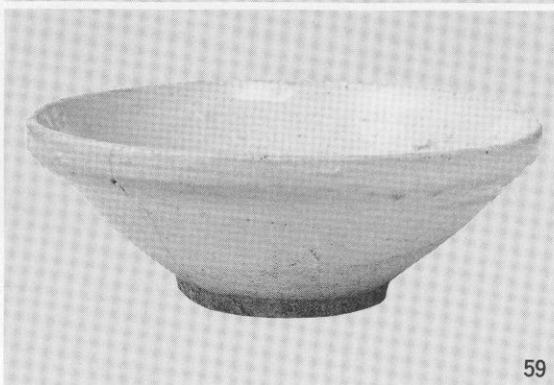
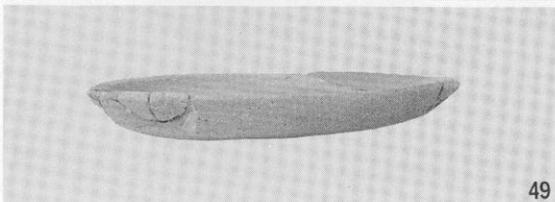
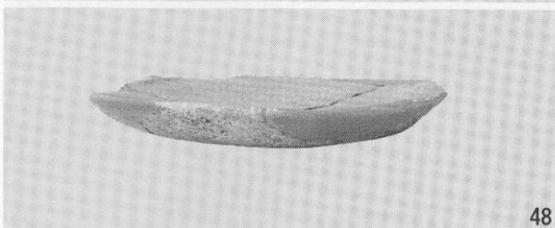
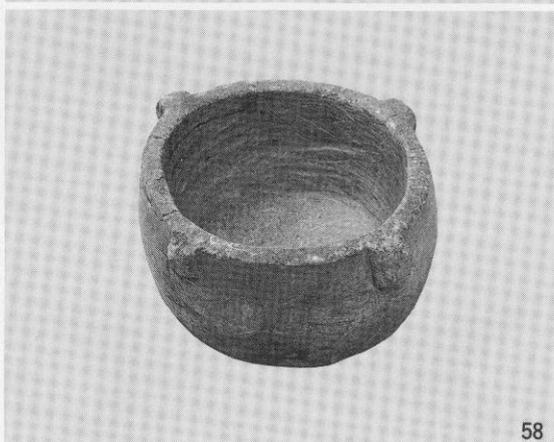
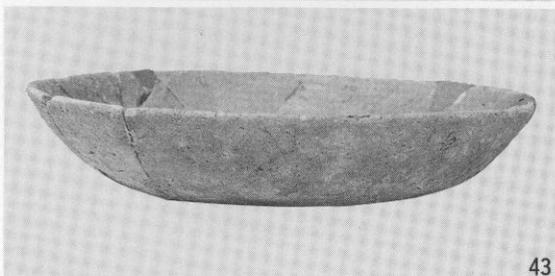


29

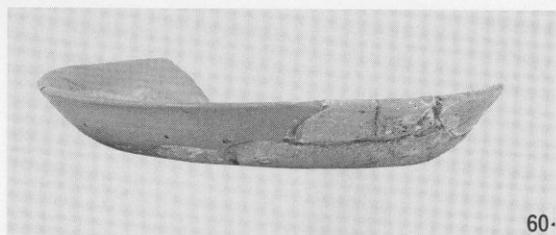


32

※図版の個別番号は挿図番号と同じ



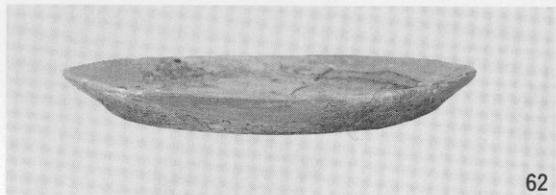
※図版の番号は挿図番号と同じ



60



61



62



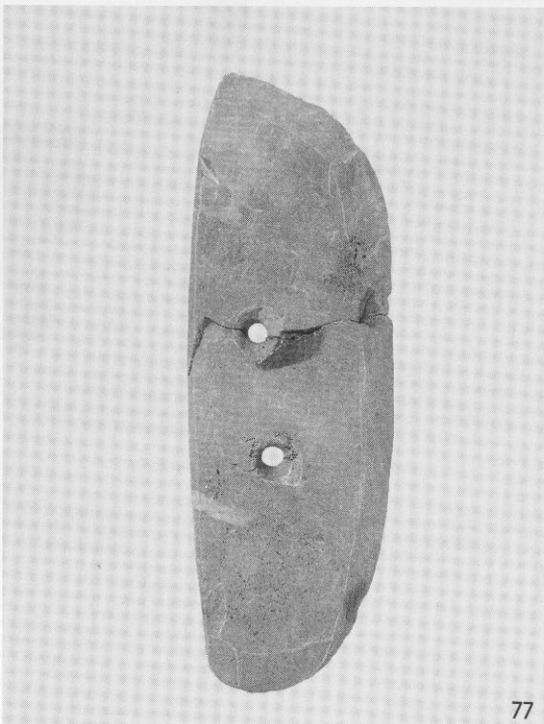
67



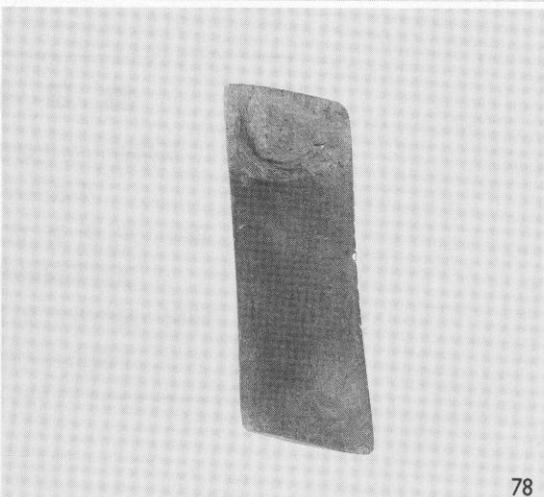
68



70

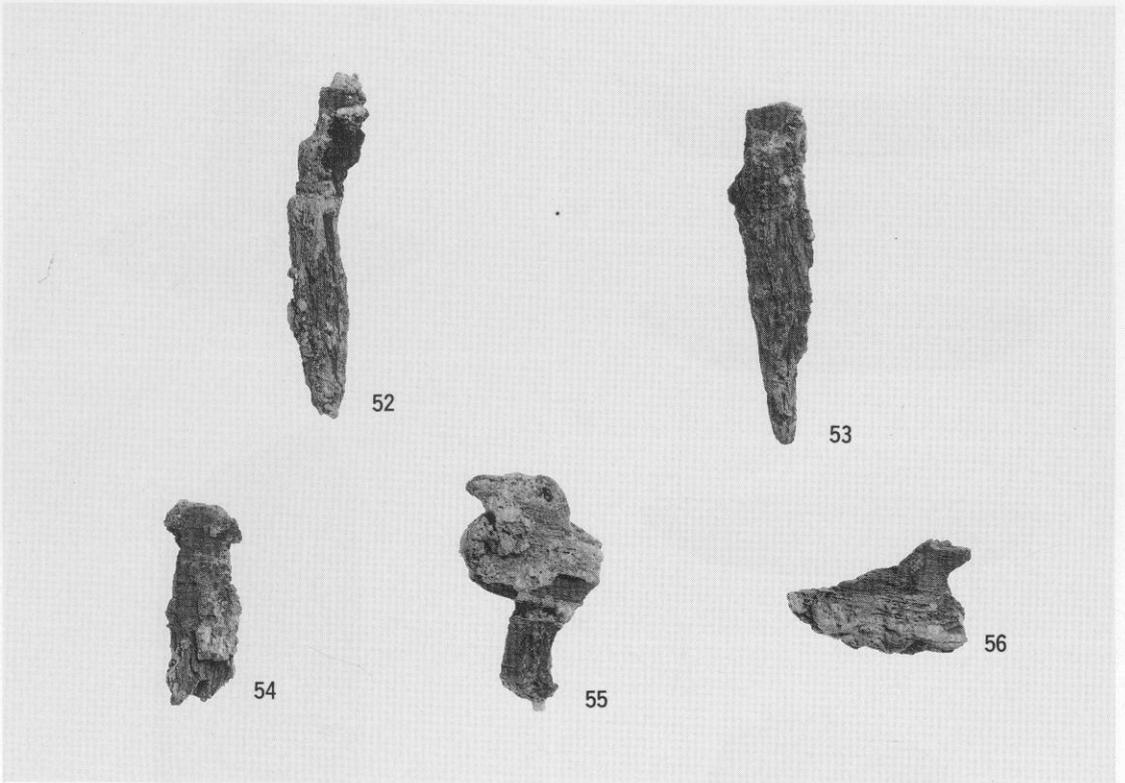


77



78

※図版の個別番号は挿図番号と同じ



※図版の個別番号は挿図番号と同じ

### 脇田遺跡Ⅲ

筑紫野市文化財調査報告書第43集

平成6年3月31日

発行 筑紫野市教育委員会

福岡県筑紫野市大字二日市753-1

印刷 瞬報社写真印刷株式会社

下関市長府扇町9番50号



付図 脇田遺跡第2・第3次発掘調査遺構配置図併合図 (縮尺1/200)